

高知寺跡

第3次調査

昭和59年3月31日

高知市教育委員会

題字 岡崎六泉



出土素弁蓮花文軒丸瓦

はじめに

奈良時代以前、7世紀の高知市の姿がどのようなものであったかは明確ではありません。しかしながら「字」名や紀貫之の『土佐日記』の記述より類推いたしますと、現在の高知市平野部の大半は水面下に没することとなります。そのため、当時の人々は、地域周辺部の水際から山裾にかけてかなりの平坦地があつて、土地が肥沃で、そのうえ飲み水の豊富な地にしてはじめて集落を形成したことでしょう。市内の古墳分布は、そういうところの隣接小丘に集中しているかのように思われます。そして、さらに大胆に言えば、その中で最も発展した地域に古代寺院が建立されたのではないでしょうか。秦はそういう地域として考えることができます。

「秦泉寺廃寺跡」については、永く地元古考の「古代の巨刹であった」との伝承があるばかりでしたが、昭和15年に重弧文軒平瓦が発見されたことによって最初の物証を得たのであります。しかし、その創建時期を確定するまでには至りませんでした。今回の発掘調査の結果によって、はじめて本寺院の創建時期は7世紀後半、白鳳時代におかれるものと考えることが可能となったのであります。

当教育委員会が実施した「秦泉寺廃寺跡」の発掘調査は今回が3度目であります。なにぶんにもその寺域が広大なために、いまだ全容が明らかになっておりませんが、この遺跡を重要なものとして位置づけ、引き続き努力してまいりたいと考えております。

さて、今回の発掘は秦文化センターの建設に伴う事前調査として実施されました。多大な労苦が予想されましたにもかかわらず、積極的に応じてくださり、かつ完遂されました「秦泉寺廃寺跡発掘調査団」と地元の関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。また、現地調査及び本書作成にあたり、ご指導ご協力をいただきました岡本健児、広田典夫、宅間一之、山本哲也の諸先生に深く感謝申し上げる次第であります。

最後に、本報告書が学術上、教育上の資料として大いに活用されることを念じてごあいさついたします。

昭和59年3月31日

高知市教育長 山本 準一

例　　言

- 本書は、秦文化センター設置に伴う事前調査として、高知市教育委員会が実施した埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書である。
- 対象地は、高知市中秦泉寺字鷹通54・他所在の秦泉寺廃寺跡である。
- 発掘調査は、昭和58年3月12日～4月21日の間に実施し（内、実働25日間）、調査対象面積は844m²である。
- 調査は、地元秦地区住民を中心として組織された「秦泉寺廃寺跡発掘調査団」にゆだね、高知県教育委員会の協力のもとで実施された。調査団の構成と調査活動に参加された方は次のとおりである。

秦泉寺廃寺跡発掘調査団構成

顧問	永野 益樹	森本 裕		
団長	和田 静雄			
副団長	大八木久米一			
幹事長	岡本 幹雄			
会計	永野 高夫			
監査	吉岡 逸郎	徳橋 英子		
団員	和田 亘玄	永野 馨	中島 内記	矢野 明保
	小田 留男	竹内 喜秋	東 幹雄	柏井 静
	松本 正明	浜田 稔	森田 義恵	門田 宣雄
	中山 明美	松本 紀郎	金子庄太郎	

調査活動に参加された方

半田 幸保	藤井 和夫	岡村 久吉	齊藤 溪龜知	北村 重徳
北村 春	米田 穂吉	吉村 満子	宮元 桂子	杉村 茂猪
山中伊佐尾	田中 玲子	中山 隆美	沢田 豊伊	矢野 君恵
矢野 鶴子	矢野みどり	田中 貢	森 常治	森本 幸子

末延 初枝	楠目 幸声	島崎美代子	岡本喜雄恵	山崎 富恵
長野 達夫	森本 和雄	森本 啓介	西森 留重	松本 明子
大野 佳代	多田さやか	高尾 常馬	近森 正直	大石 正義
西森 秀男	西森 誠	三谷喜代次		

現地においては、岡本健児（高知女子大学教授）・広田典夫（日高養護学校教頭）・宅間一之（高知県教育委員会文化振興課社会教育主事）・山本哲也（高知県教育委員会文化振興課主事）諸氏の指導のもとに調査が実施された。

5. 発掘調査においては、秦地区公民館・秦地区農協・高知県教育委員会の全面的な協力をうけたほか、作業実施にあたり、隣接地権者をはじめ地区的住民各位に多大な協力を得た。厚く感謝を申し上げたい。
6. 本報告書の編集は、宅間一之、山本哲也両氏に担当していただき、執筆は山本哲也氏にお願いした。なお、報告書作成にあたっては、岡本健児・広田典夫の各先生方から種々御教示をいただいた。厚くお礼申し上げます。
7. 遺構実測は、株式会社開成測量の協力を得て、調査員全員があたった。遺物の実測・整図は山本哲也氏、遺物写真は宅間一之氏の労による。
8. 本書で使用した遺物写真は $1/3$ に、遺物実測図は $1/4$ に縮少統一した。なお、折り込み図面による遺構実測図は、 $1/40$ 縮少である。

目 次

I 遺跡の位置と環境	4
II 調査に至る契機と経過	6
III 調査の内容	7
1. 調査方法	7
2. 層序	7
3. 検出遺構と出土遺物	9
IV まとめ	14

挿図・図版目次

挿 図

1 調査地位置図	16 調査区南壁土層序
2 調査区設定状況図(1/400)	17 調査区断面図
3 調査区遺構平面図	18 調査区遺構断面図
4 調査区北側・遺物出土状況図	19 軒丸瓦・鬼瓦拓影・実測図
5 調査区北西・瓦片出土平面図	20 出土遺物拓影・実測図
6 SK-04 上層遺物出土状況図	21 軒平瓦拓影・実測図
7 調査区北西・遺構平面図	22 平瓦拓影・実測図(1)
8 調査区北西・遺構断面図	23 " (2)
9 SB-01・SD-02 遺構平面図	24 " (3)
10 SB-02 遺構平面図	25 " (4)
11 SB-01 "	26 " (5)
12 SK-03 "	27 " (6)
13 SK-04・SD-03 遺構平面図	28 " (7)
14 調査区東壁土層序	29 " (8)
15 調査区北壁土層序	30 " (9)

- 31 平瓦拓影・実測図⑩
 32 丸瓦拓影・実測図
- 図 版
- 1 調査区東・トレンチ設定状況（西から）
 調査区東・集石検出状況（南東から）
- 2 調査区南東・トレンチ設定状況
 調査区北側・遠景（南西から）
- 3 調査区南東・SD-03 検出状況
 SD-03・SK-04 検出状況（東から）
- 4 SD-03・SK-04 検出状況
 SD-03 遺物出土状況（北西から）
- 5 SK-04 遺物出土状況（北から）
 SK-04 遺物出土状況（南から）
- 6 SK-04 完掘状態・瓦片出土状況
 SA-01・SK-03・SK-04・SD-03
- 10 SK-01・検出状況・上部瓦片出土状態
 SA-01（南から）
- 11 調査区東端トレンチ・土層堆積状況
 調査区北側・瓦片出土状態（南から）
- 12 調査区北側・瓦片出土状態遺構検出状況
 同上 近影（南から）
- 13 調査区北西・SX-03（東から）
 SX-01・柱穴（東から）
- 14 SX-02 上部・瓦片出土状態
- 15 調査区北西・SK-01～03・SK-01
 調査区北西・SX-03・SD-01
- 16 調査区北西・軒丸瓦出土状態
 同上 近影（南東から）
- 17 調査風景（西から）
 調査区全景（西から）
- 18 出土遺物軒丸瓦
 " "
- 19 " "
- 20 " 軒平瓦
- 21 " 平瓦 SX-02
 22 " "

- 23 出土遺物平瓦
- 24 " "
- 25 " "
- 26 " "
- 27 " "
- 28 " "
- 29 " "
- 30 " "
- 31 " "
- 32 " "
- 33 " " •SK-04
- 34 出土遺物平瓦・丸瓦
- 35 出土遺物平瓦
- 36 " 丸瓦
- 37 " "
- 38 調査風景（西から）

I 遺跡の位置と環境

秦泉寺廃寺跡は、現在の行政区画で、高知市中秦泉寺鷹通・他に所在している。中秦泉寺は、広義な地区名である秦地区のほぼ中央部に位置しており、高知市の北部、愛宕山と迎水寺山にはさまれた主要県道高知本山線を中心として、周辺は住宅密集地域の景観を呈している。秦地区は、北・東・中・西・南の各秦泉寺からなる土地の総呼称であるが、昭和30年代後半における高知市北部の新興住宅地開発（高知市のベッドタウン化）に伴って、急速に人口集中化をした地区でもある。この現象は、昭和50年代末の現代においても継続しており、建売住宅（一戸建て）・マンション・食料販売店などの新建築に加えて、住宅密集区域が要する環境改善の諸工事によって、本来の土地景観が目まぐるしく変貌しつつある。

秦泉寺廃寺跡は、高知市の北部を流れる久万川の支流金谷川と、西側の丘陵・迎水寺山が接する扇状台地上にあり、遺跡北部に水田・畠を残して、周辺は宅地化されている。遺跡の発見の端緒は、開墾による瓦片の出土であるが、昭和51年に長岡康・山本淳甫氏が調査されて、蓮花文鑑瓦・巴文鑑瓦・重弧文字瓦などの発見により、寺院跡の所在が推定されることとなった。（註1）

その後、昭和50年・52年における高知市教育委員会の調査において（註2）、奈良時代に属すると考えられる遺構・遺物の検出で、具体的な寺院跡の確認作業が一段と進展することとなった。

本廃寺跡の個別の名称については、これまで文献上にも、出土遺物のうえからでも推測される手掛りはなく、所在地の名称によって便宜上「秦泉寺廃寺跡」と呼称されている。本遺跡の周辺には、6C末～7C中頃の古墳時代・後期古墳が集中しており、寺院跡設置の諸条件としての歴史的景観をみたしており、『和名類聚抄』による土佐郡・土佐郷に所在地が該当するものと考えられるところから、土佐郡衙関連ないしは、郡寺的な性格をもった古代寺院跡ではないかと推定されている。（註3）

秦泉寺廃寺跡周辺からは、第1次・第2次発掘調査地点の北部水田地から、

縄目をもつ須恵質平瓦片・須恵器片が、金谷川を東にこえて北秦泉寺地区から奈良時代～平安時代に属するものと考えられる須恵器杯片・椀片・甕片が採集されており、本遺跡周辺の空間的状況から、秦泉寺廃寺跡北部との関連性が今後問題となってこよう。（第1図）

註1 岡本 健児 「高知県史 考古編」昭和43年2月 高知県

註2 広田 典夫 「高知市秦泉寺廃寺発掘調査 第1次調査概要」高知市教育委員会

広田 典夫 「秦泉寺廃寺 第1次・第2次調査」1977年3月31日
高知市教育委員会

註3 註1と同じ

II 調査に至る契機と経過

高知市中秦泉寺字カネツキ堂他において、古代寺院跡が存在することが知られたのは、昭和15年の事である。その後、昭和50年・52年に実施した学術調査の成果により、奈良時代に属する瓦類・土器等が出土し、また柱穴・溝等の遺構が検出されて、発掘調査区を含む周辺地区に寺院跡が存在していたことが確認された。

高知市では、公共施設整備の一環として、人口増加が激しい市域周辺部において文化センター設置を促進しており、昭和58年度事業として、従来設置がなされていなかった秦地区において当該施設建設の計画があった。

設置予定地は、市公有地である高知市中秦泉寺字鷹通54番1・3・5・6・7であるが、これまでの発掘調査によって推定されていた秦泉寺廃寺寺域内にあるために、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等として、事前の発掘調査が必要となった。このため、当教育委員会は、開発担当部との調整の結果、事前の発掘調査を実施することとし、調査の円滑な推進を目的に、地元秦地区において調査団が編成されたのを機に、県教育委員会・県文化財保護審議会委員の指導を得て調査に着手した。なお、調査団は秦泉寺廃寺跡発掘調査団と呼称された。

調査は、昭和58年3月12日～4月21日の間に高知市中秦泉寺字鷹通における工事予定地（844m²）を対象に実施した。調査期間中においては、降雨日数が多く種々の制約をうけたが、秦泉寺廃寺に関連する遺物包含層の確認とともに、柱穴・大溝・瓦だめ等の遺構が検出され、多量の遺物の出土があった。今次の調査によって、秦泉寺廃寺の内容について直接ふれる手掛りが得られ、大きな成果があった。

なお、検出された遺構に基づき、当教育委員会では、再度の協議を関係部と実施し、当初の設置プランを変更して、SA-01・SD-03をはじめ、調査区北西部におけるSX-01～03・SD-01を保存することとし、調査後埋め戻しを実施した。

III 調査の内容

1. 調査方法

調査対象地は、標高約7mをはかる埋め立地であったが、耕作土表面上に厚さ0.7～0.8mで碎石が盛られており、埋め立て実施前は、水田として利用されていた。調査地東側は、県道高知～本山線を隔てて民家が接し、北側は水田に、西側は碎石による埋め立地、そして南側は、工場に接している。

発掘調査の実施にあたっては、布敷されている碎石土を除去した後、耕作土および盤土を主として機械力を導入して排除し、遺構・遺物の検出に努めた。調査区は当初、対象地に十字型にトレンチを設定し検出作業を行ったが、トレンチ東側で集石と瓦類の集中部分が（図版1）、南側で瓦だめ遺構（SK-04）（図版3・5）が、西側で柱穴の存在が認められたため、検出遺構を中心に拡幅して、調査区を広げることとなった。最終的には、調査対象地周辺における水路・排水路・あぜ等へ影響を与えるよう調査区を設定し、大溝（SD-03）の検出された調査区南東部・遺構の認められぬ調査区北東部では、トレンチ調査で状況判断を実施して、拡張しなかった。なお、調査対象地においては、遺跡の性格から、3m等間隔（天平尺で10尺）で地区割りを実施し、磁北を基準方向としたポイント設定を行った。（第2図）

2. 層序

調査区における堆積土の状況は、調査区北側と南側でかなり相違した堆積内容であった。なかでも、遺構検出があった北西部と南東部では複雑な土層序を呈している。

基本的な堆積層としては、粘質土層と疊層に区分されるが、色調および質的相違から粘質土層は数層に区分される。ポイント0点を基準に、調査区を仮にA～D区に分割してみると、土層の平面分布状況を概観することができる。A区は、最も繁雑に遺構が形成されているが、遺構の検出面は明茶色粘質土層上であり、茶褐色粘質土・茶灰褐色粘質土・褐灰色粘質土等がその上を覆ってい

る。そのなかで、茶褐色粘質土・茶灰褐色粘質土・褐灰色粘質土はいずれも、奈良時代に属する瓦類・土器等を包含しており、またその分量も多い。褐灰色粘質土層上では、黄茶色粘質土を含有する遺構の形成が認められる。B区では、遺構検出面は茶灰色礫層(4~5cmの石)上であり、その上を、淡茶色粘質土層が覆っている。この淡茶色粘質土は、C・D区における淡黄茶色粘質土に類似するが、遺物の含有は皆無に近く、またその堆積度合も厚い。特にB区南西側ではかなり厚くなっているが、遺構の形成は認められない。C区は、大溝・瓦だめ等の遺構形成もあって、数種の粘質土が堆積しているが、遺構の検出された土層上をおおう埋土には、A区のような濃厚な遺物包含は認められず、出土する遺物は少量であった。大溝S D-03が形成され、堀削行為をうけた土層、灰茶褐色粘礫土、明茶色粘質土は、粘礫土と粘質土であり、成分的に異なる。遺構形成時において单一層が必ずしも平面的に垂平分布していなかったことを物語るものであろう。D区は、柵列と考えられるピット列等を除いて、遺構の存在は、明確でない。遺構検出面はいずれも礫層上であり、その上を茶褐色粘褐色層・明茶褐色粘質層が覆うが、ピット内堆積土はいずれにも該当しない暗褐色粘礫土である。D区における堆積土では、暗茶褐色粘質層上部において、水田址と思われる遺構が形成されている。また、茶褐色粘礫層上(D区北部周辺)では、奈良時代に属する瓦類・土器片が、栗石とともに集中していたが、土層堆積状況・遺物の磨滅痕跡から遺物に属する時代に直接関係のない、後の行為(開墾等)によるものと考えられる。

以上、調査区における土層堆積状況を概括してみたが、土層序として一律的な基本層序をとりあげることはできない。遺構形成時の自然状態での堆積状態は、起伏に富んだものであったろうし、その後の人為的な地形改変によって消失した堆積土も多かったものと考えられる。

遺構検出面が同一層上ばかりではなく、A~D区において相違が認められること、明らかに、遺構の切り合い関係・遺構検出面の覆土の上下関係から検出遺構が時期幅を有していることから、堆積土層の変化が著しかったものと思われる。

3. 検出遺構と出土遺物

今回の調査によって得られた遺構・遺物は、溝3条・棚列2・瓦だめ4基・柱穴（円形・方形）・ピット・不整形土壙3と多数の瓦類・土器等である。遺物の属する時期は、それぞれ、古墳時代後期～奈良・平安時代の遺物であるが、遺物出土総数の85%が奈良時代に所属する遺物であり、秦泉寺廃寺関連の物である。他は、平安時代に属する物10%・古墳時代後期・飛鳥・白鳳期の遺物が5%を含まっていた。

遺構

検出された遺構は以下のとおりである。なお、遺構の性格について分類可能なものはSD（溝）・SA（棚列）・SK（瓦だめ）・SB（建物址）とし、やや不明確な場合はSX（不整形土壙）等としてそれぞれ番号化することとした。また、明確ではないものは柱穴・ピット等の一般呼称で扱うこととした。また、調査区における位置関係を明確にするために、ポイント0点基準での地区名称A～D区を使用して略述する。

① 溝

SD-01～SD-03である。SD-01は、A区北側中央端で検出された。2個の北東方向に並列する柱穴によって肩部がきかれている。SD-02は、B区南側で検出され南方向に掘削されている。SD-03は大溝である。幅2.2m、深さ0.25～0.4mであり、5層に区分される溝内堆積土が認められる。西端はSK-04によって破壊されているが、東方向に延びるものと考えられる。溝内堆積土では、黒褐色粘質土下に須恵器片が認められたほか、茶褐色粘質土中から土師器高杯片が検出された。溝の機能は、褐色粘質土の堆積により失われる。

② 瓦だめ

SK-01～SK-04である。SK-01・SK-02はA区南側で検出された。SK-02内の瓦類にくらべてSK-01出土瓦類には、製作技法の新しいものが含まれる。SK-03・SK-04は、C区北側で検出された。SK-03は若干の瓦片と土器片を含み、掘削深度も浅い。SK-04は、SK-01～SK-04のなかで、最も大型である。SD-03の西端にきりこんでいる。遺構内には、3層

に区分される堆積土を有し、最終面においても瓦の投棄が認められた。また、炭化物が濃厚に遺存していた。SK-03・SK-04とともに、炭化物・焼土層が認められる。

③ 桁列

SA-01・SA-02であり、D区において検出された。SA-01は、磁北に對してやや西よりの方向で配列しており、C区大溝SD-03とは方向を少し異なる。SA-02は、SA-01の西側に位置し、同一方向であるものの、3個しか検出することはできなかった。やや不明瞭である。SA-01・SA-02とともに、柵列を構成する遺構は掘り方を有しないピット(穴)である。疊層上で検出された。

④ 建物址

SB-01・SB-02であるが、明確ではない。形態不明であって柱穴の方向から推定した。それぞれ柱心を有する。掘り方は円形であり、疊層上で検出された。検出遺構を中心に広範囲に調査することによって明確となろうが、現時点では推察の域をでない。柱穴内出土遺物は皆無であり、周辺には瓦片1片も散布していない。なお、柱心は、柱を引き抜いたあと、故意に詰めこんだような、赤黄色粘土が堆積していた。

⑤ 不整形土壙

SX-01~03であり、A区北側で検出された。ともに、多量の瓦類・土器が出土している。内部には、遺物を含んだ粘質土が堆積している。瓦だめの一種かもしれないが、SK-01~04にくらべて判然としない。SX-01・SX-03とSX-02は形態が異なり、同種では扱えない。A区北西部をさらに拡幅して検討すれば、明確となろうが、現時点では不明。ただ、多量の瓦類と土器類がA区北東部で集中して検出されたのは、多数の柱穴跡の形成とともに、注意されよう。

⑥ 柱穴・ピット

A区・C・D区で検出された。A区では、円形・方形の掘り方をもつ柱穴が多数群在する。柱穴跡である以上、建物等の建造物が存在していたことは疑え

ないが、不明確。広範囲な調査により明確となろう。柱穴跡は、A列、B列で方向が復元できるものがあるが、いずれもSD-01・SX-02の肩部をきりこむ形で形成されている。SX-02北西部に存在する2個の柱穴を除いて、柱穴内からは遺物が出土しなかった。柱穴の多くは柱心を有する。ピットは6個存在する。C区では、SD-03の南に接して1個だけ、ピットが確認された。D区では、SA-01・SA-02の他に2個確認されたが、散在する。

遺 物

出土遺物は、以下のとおりである。

①瓦類

軒丸瓦（素弁蓮花文3・単弁蓮花文1・複弁蓮花文1）・軒平瓦（重孤文6）・丸瓦・平瓦・鬼瓦（破片で3片）

②土器

須恵器（杯身・蓋・碗・瓶・高杯・盤・甕・横瓶・鉢・皿）

土師器（杯身・蓋・椀・皿・鍋・甌）

出土した遺物は、SK-01～SK-04・SD-03・柱穴を除いて、D区の一部の他は、ほとんどA区北部から出土している。調査区における遺物出土量からすれば（構内出土も含めて）、全体の約60%がA区北部から出土しており、遺物の散布状態としては、注目されよう。

瓦類（第19図・図版18～37）

軒丸瓦…（第19図1～4・図版18-1～4）1・2とも、素弁8葉蓮花文軒丸瓦である。周縁は、素文縁であり、花弁に稜を有する。1は、肉付けのある花弁に稜線を有し、花弁端は丸味をおびて反転している。中房には、13個の蓮子をもち、中房径4.5cm・周縁での径15.7cmを測る。焼成は良好であり、小砂粒を多く含む。色調は淡黄茶色であり、瓦当部と丸瓦との接合部には布目痕を有する。2は、1の退化的な形態を呈しているが、花弁・蓮子の配置とともに、規則性の感じられる軒丸瓦である。花弁は、肉付けがなく、稜線・輪郭線が強調されており、花弁端は丸味をおびて反転している。中房には、1+8の蓮子を配し、中房径4.2cm、復原周縁径17.4cmを測る。チャート・長石・石英など

の小砂粒を多く含み、内面・器肉は赤黄褐色、外面は明黄茶色である。3は、複弁蓮花文軒丸瓦である。中房には1+8(欠損1)の蓮子を配し、中房径6.8cmを測る。小砂粒を多く含み、淡黄茶色を呈する。4は、単弁蓮花文軒丸瓦である。中房・周縁を欠損し、花弁の輪郭線は、彫り込みによって表現されている。8葉の花弁を有するものと考えられる。軒丸瓦のなかで、1・2は、素文縁有稜線花弁端円形形式(註1)に類似するが、花弁端が丸く反転しているため、素文縁有稜線花弁端円形反転形式とも呼称されようが、将来の観察をすすめてゆきたい。

軒平瓦…(第21図・図版20 1~3)

段頭をもつ、重孤文軒平瓦であり、いづれも三重孤文である。細片のため、全体の形状は不明であるが、秦泉寺廃寺跡における第1次・第2次発掘調査によって出土した軒平瓦と同じタイプのものである。2は、SK-04の上層から出土した。

鬼瓦…(第19図・図版19 5~7)

形状から鬼瓦片と考えられる。部分位置は不明であるが、5は波状文が、6は波状文と列点文が施文されている。7は、5・6と若干質が異なり薄手であるが、胎土等・色調が類似しており、一応この箇中に含めた。わら類の植物を多く含んでいる。5・6・7とも、内面はヘラ削りのあと、ナデられている。

平瓦…(第22図~第31図・図版21~36)

綾杉文の叩き目を裏面に有するものと、格子目・無文・縄目が施されるものとで、一応4類に区分できる。それぞれ、須恵質のものと土器質のものとがあるが、タイプ的に時代判別をすることは難しい。ただ、一般的に、表面の布目痕において、細布と荒布とがそれぞれ使用されており、時代を区分できる可能性はあるが、現時点では困難である。図版36の瓦片は、SX-01から、図版33の格子目隅切り瓦は、SK-04底面から出土したものである。なお、第20図20・21は焼成・特徴などから、ほとんど須恵器的な質をもち、須恵器類とともに、窯跡で作成・生産された可能性がある。

丸瓦…(第32図・図版37)

行基葺丸瓦が大半であり、玉縁付丸瓦は、今回の調査では検出されなかった。繩目・無文の表面をもち、出土遺物のなかでは、数量的に少なかった。

なお、今回の調査においては、軒丸瓦1・2とともに、3・4が出土し、瓦における型式的な変遷のうえからは、時期差のある寺院活動が認められた。軒丸瓦1・2の内容からすれば、三重弧文軒平瓦とともにセットとなり、本寺院の創建時期は、7C後半、白鳳時代におかれるものと考えられ、高知県最古の古代寺院の1つとして捉えることが可能だと思われる。

須恵器・土師器…(第20図)

須恵器(1~14)・土師器(15~19)であり、時代幅のある遺物が出土している。このうち1~3・12の須恵器は、6C末~7C前半に、6・7・8は7C後半に属し、他は(4・5・9)8C・奈良時代前半~中葉以降にかけての遺物であると考えられる。土師器は、16の甕片・15・17・19の形態から、奈良時代中葉を前後する時期のものが多いが、18の如く奈良末~平安時代前半に属すると考えられる遺物もある。須恵器・土師器とも、SD-03・調査区北西部周辺から集中して出土しているが、全体的に遺物は細片が多く、図示できるものは少量であった。

註1 石田茂作・稱垣晋也 縮刷版「飛鳥・白鳳の古瓦」奈良国立博物館編

昭和57年1月31日 東京美術

IV まとめ

発掘調査対象地は、従来の調査によって推定された寺域の南東部に位置するために、具体的な寺院遺構の検出が予想されていた。今回の調査では、礫石を配した明確な主要伽藍・廻廊などの付属施設の検出は認められなかったものの、白鳳時代～奈良時代後半、平安時代前半にかけての遺物を含む包含層・大溝・溝・瓦だめ・柱穴等を見出だすことができた。調査区における土層堆積状況は、A～D区においてそれぞれ異なっていたが、遺物包含層の存在、遺構内出土遺物・平面的な遺構の切り合い関係・土層序の上下関係などから、当該調査区における検出遺構の変遷について、ある程度把握することが可能であった。略述すれば、以下の如くである。

I期……S D-03・大溝であり、東方向へのびている。溝内堆積土中から白鳳時代～奈良時代初頭を前後する遺物が出土している。

II期……S D-01・S X-01～03・A区柱穴の一部。A区西北端において遺構の形成が認められる。出土遺物は、白鳳時代～奈良時代中頃に属すると考えられる瓦類・土器類である。

III期……A区柱穴A・B列・B区S B-01・S B-02・S A-01(S A-02)
・SK-04

A区柱穴A・B列はS D-01・S X-02をきっている。A区柱穴A・B列およびB区S B-01・02・S A-01は磁北に対して西にかたむき、ほぼ同一方向をとっている。SK-04等が形成される。

IV期……SK-02・SK-03・A区柱穴の一部(方形プラン)瓦だめが形成される。平安時代に属する土器器がSK-03より出土している。

V期……SK-01・SK-02・SK-03よりも新しい遺物が出土している。

I期～II期は、秦泉寺廃寺である白鳳時代～奈良時代寺院址が創建され、機能が整備されていった段階にあたる。

C区のS D-03は、秦泉寺廃寺に関連する大溝(例えば外郭を画する溝として設置されていったもの)である可能性を有する。

III期とした遺構が形成される段階は、寺院址は衰退し、かわって別の施設が設置される時期にあたる。（平安時代前半以降）II期とIII期の間には一段階以上の画期があろうか、当該調査区における検出遺構から抽出することはできなかつた。

IV期では、瓦だめが形成されているが、III期～V期に至る移行は、それほど時間差のない範囲でとらえることができよう。

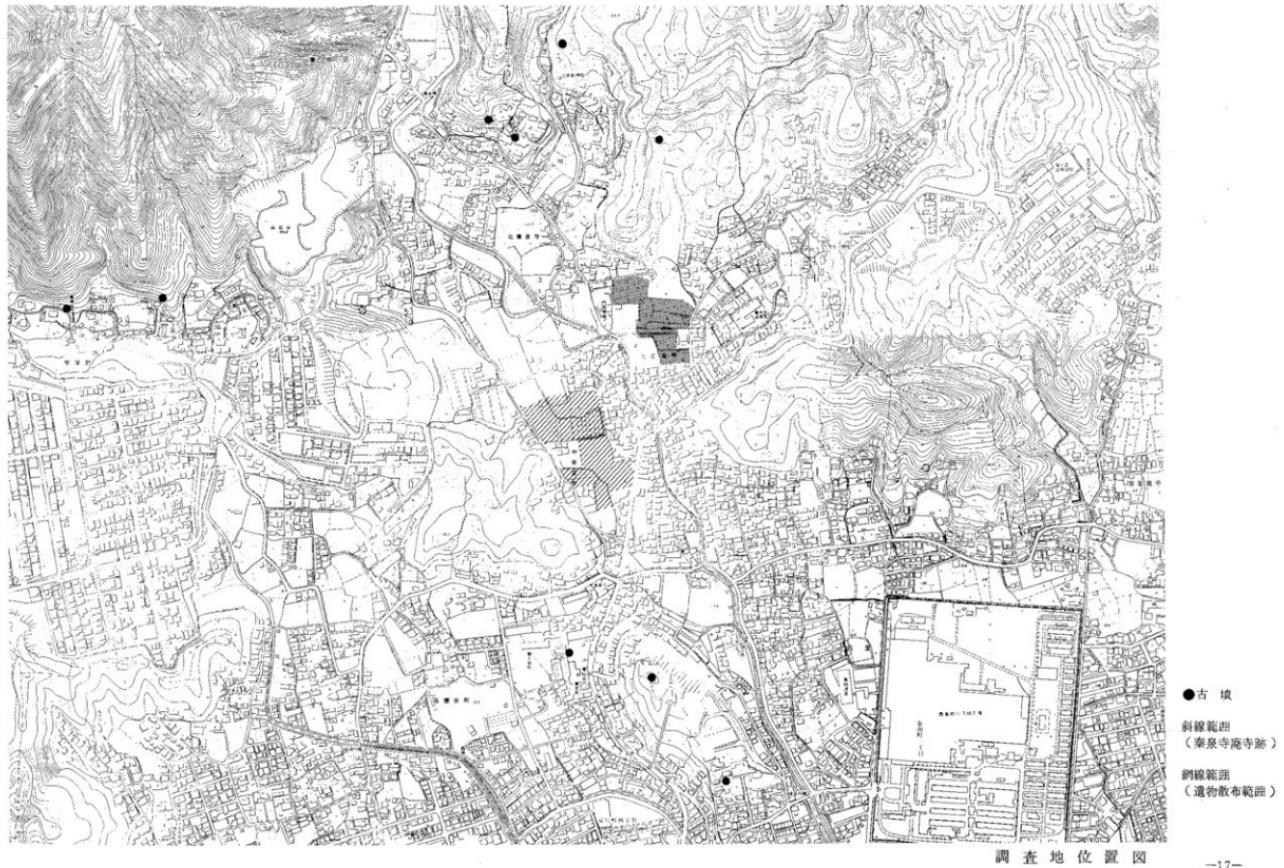
秦泉寺廃寺と直接関連する遺構は、I期・II期に形成された大溝・土壙（不整形）・柱穴等となるが、調査区で検出された遺構の性格を明確にするためには、A区北部及び、C区東部における周辺の遺構形成状況が問題となろう。

昭和50・52年の調査によって検出された遺構と、今回の発掘調査で検出された遺構は合致しない。SD-03が外郭の溝であったと仮定したならば、本調査区は寺院の寺域端であることになるが、なお確証ではない。A区北部の遺構検出状況とあわせて、今後の課題となろう。

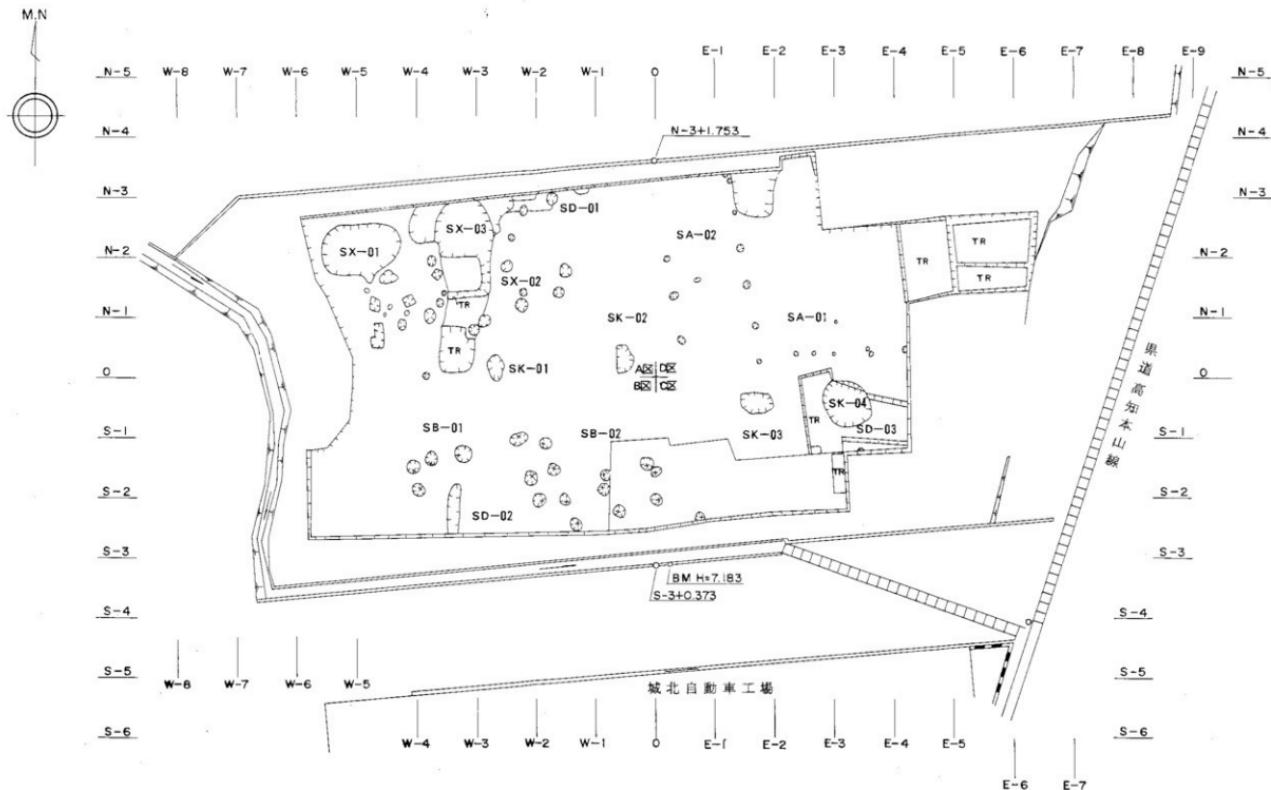
四

挿

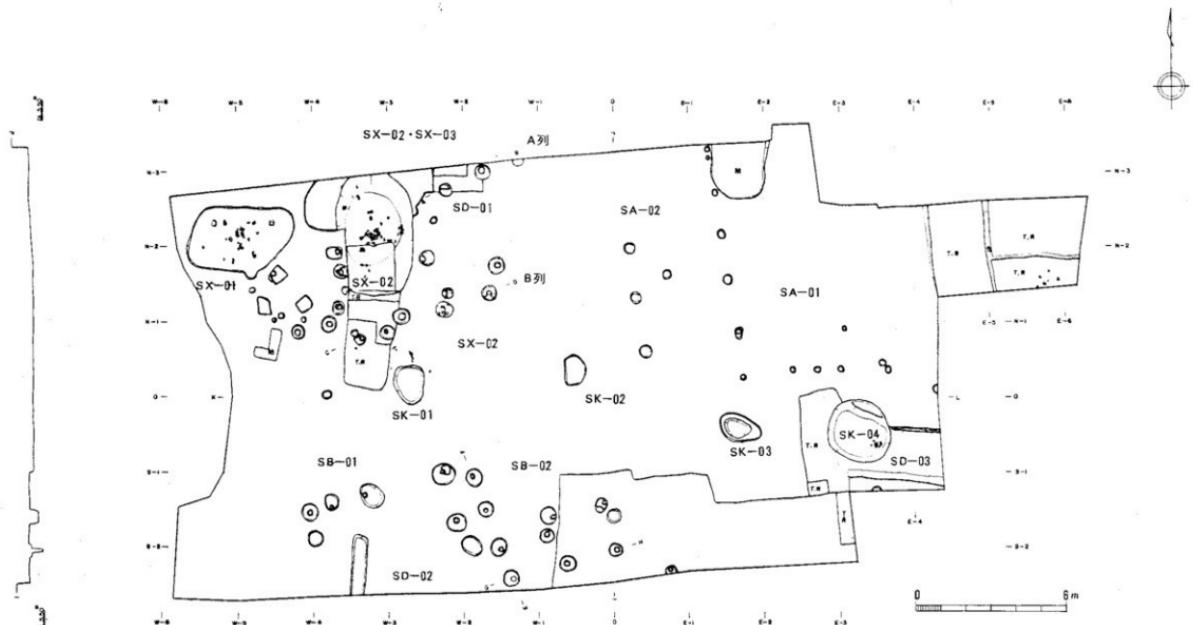
第 1 図



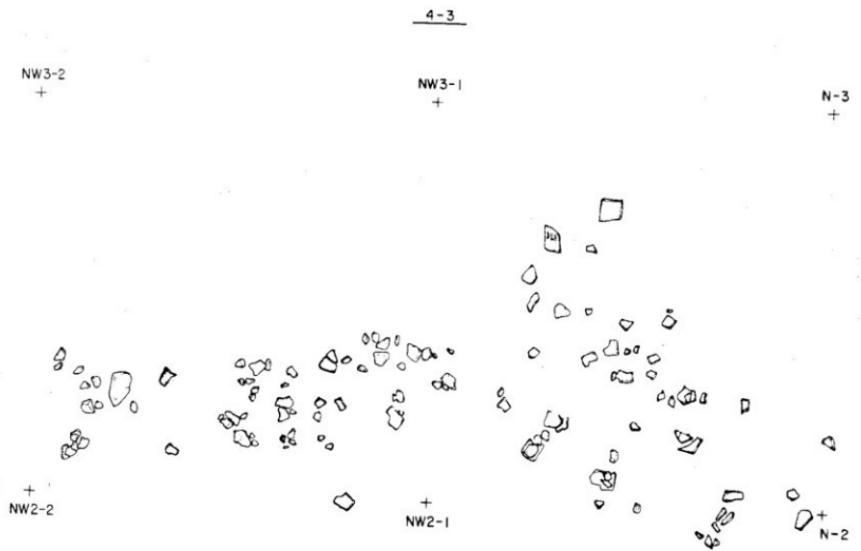
第 2 図



調査区設定状況図 (1/400)

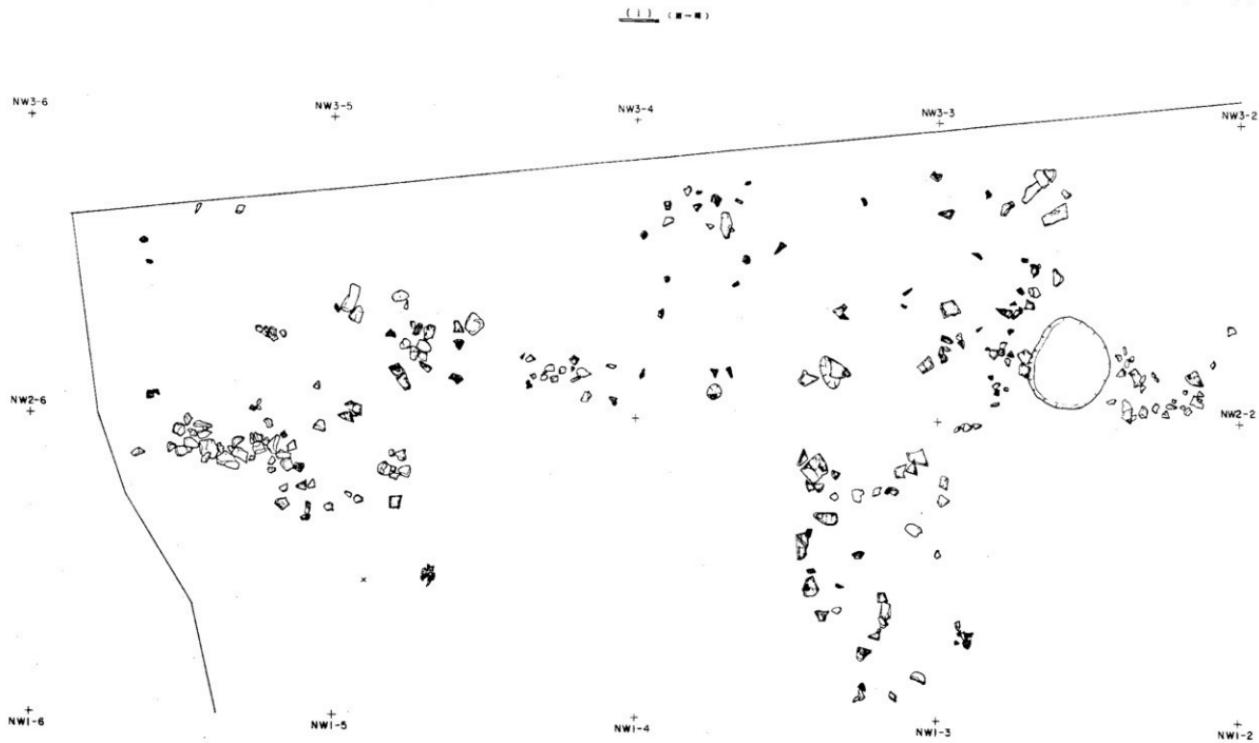


調査区遺構平面図

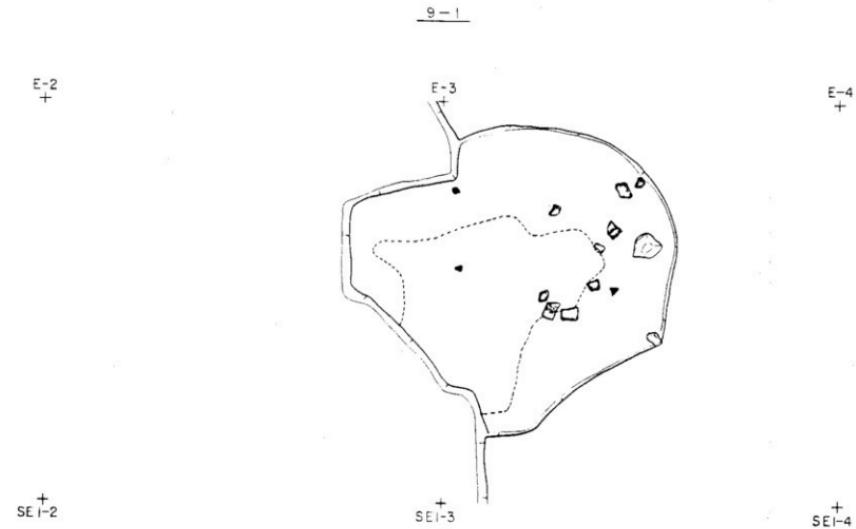


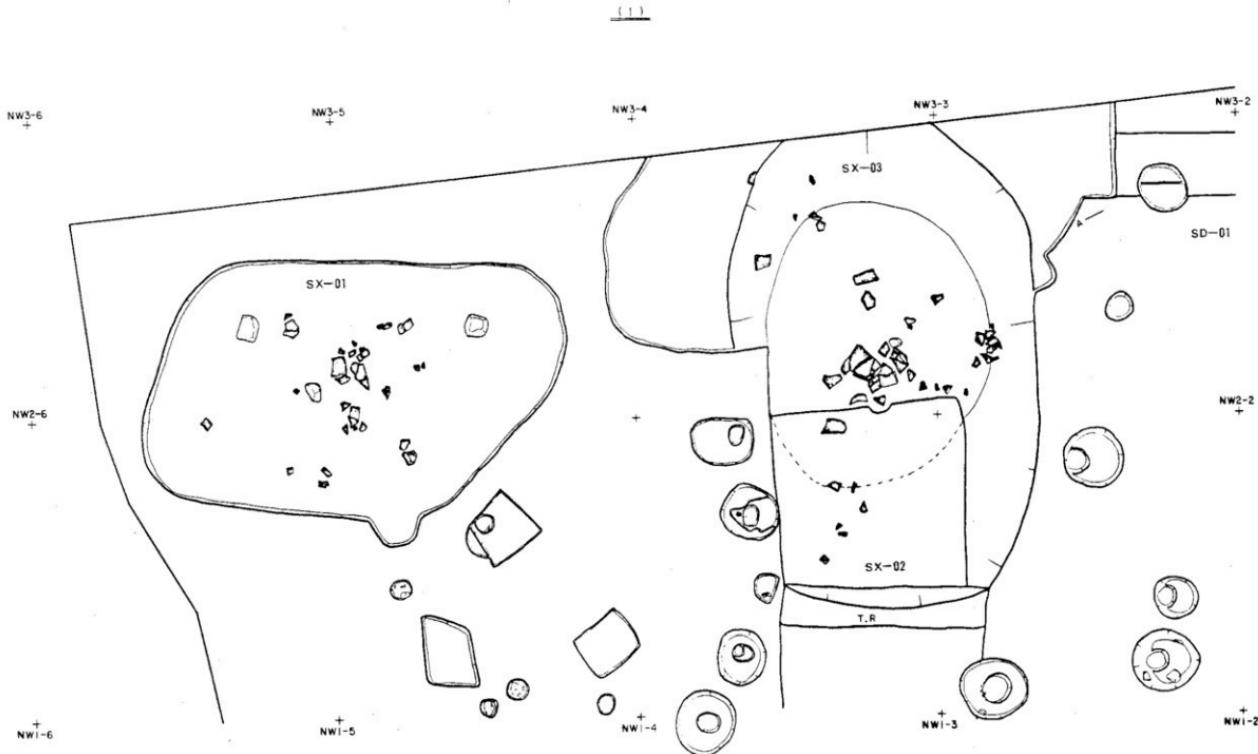
調査区北側遺物出土状況図

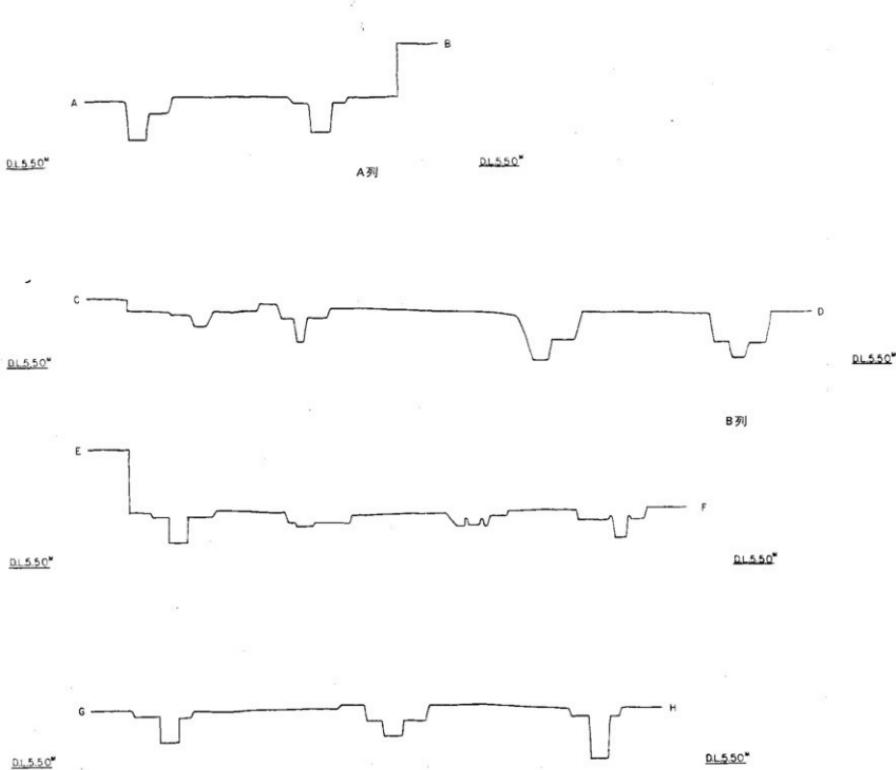
第5図

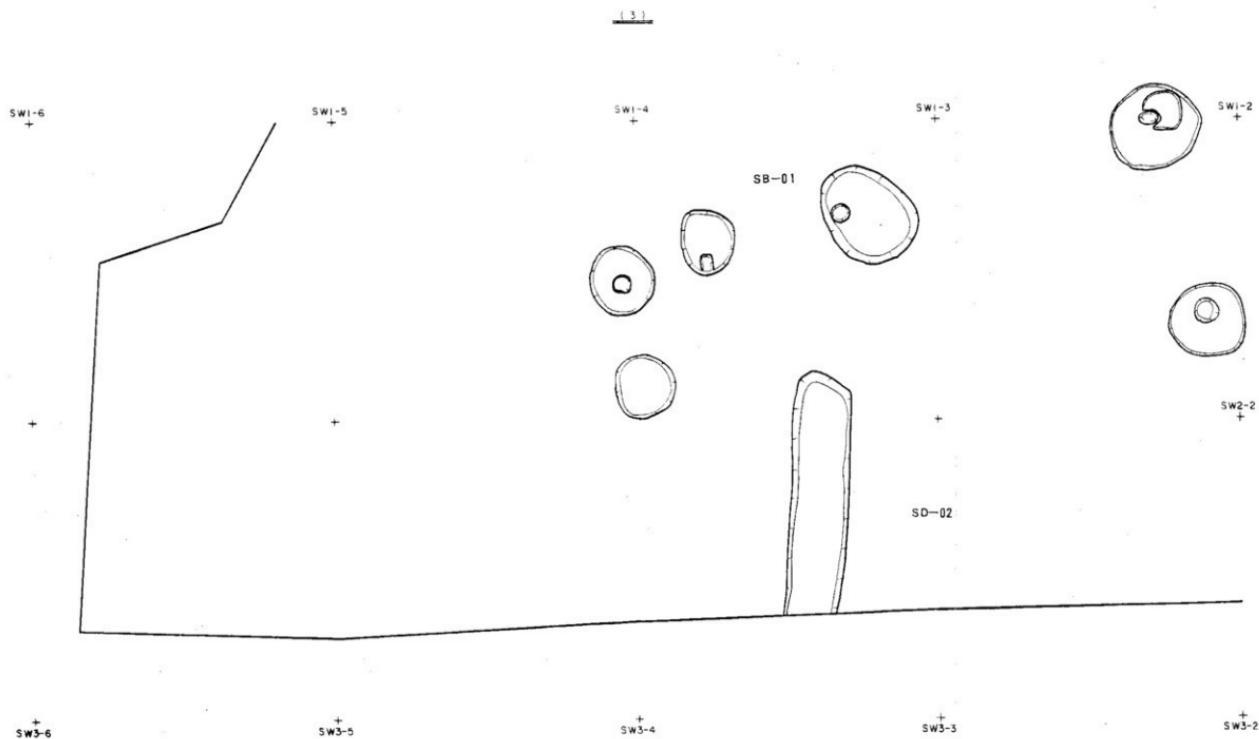


調査区北西・瓦片出土平面図

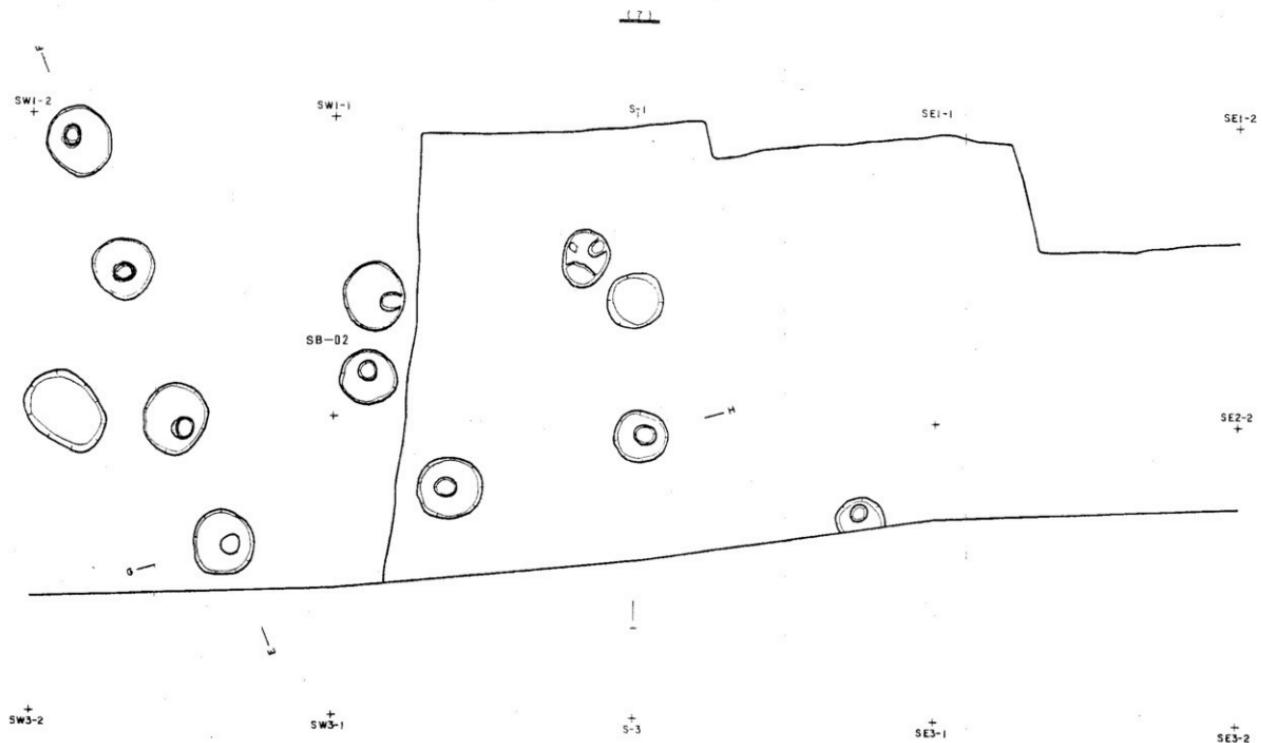




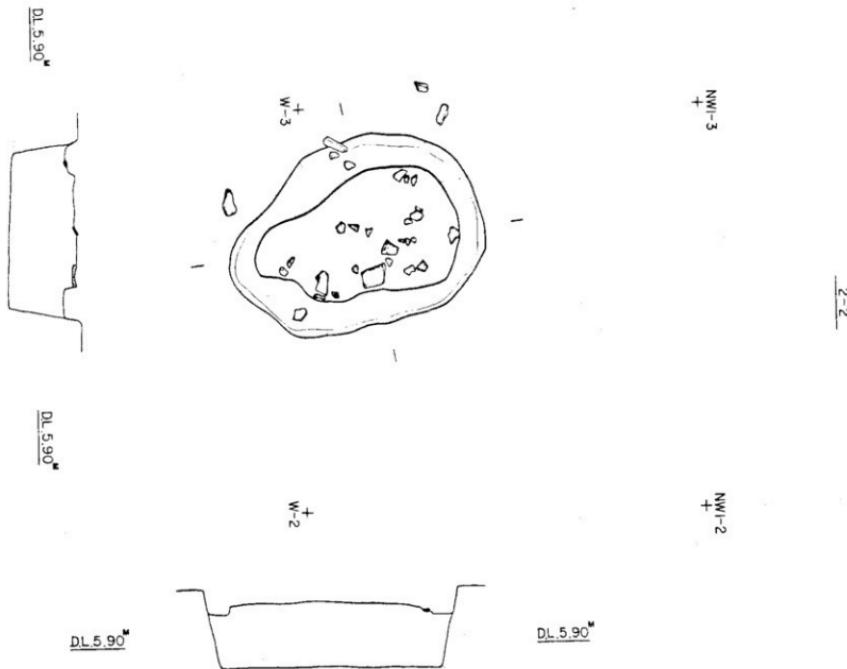




第 10 図



第 11 圖

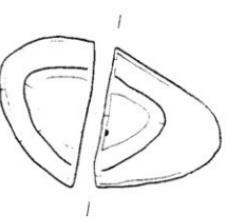


SK-01 遺構 平面図

6-3

E-1
+

E-2
+



SEI-1
+

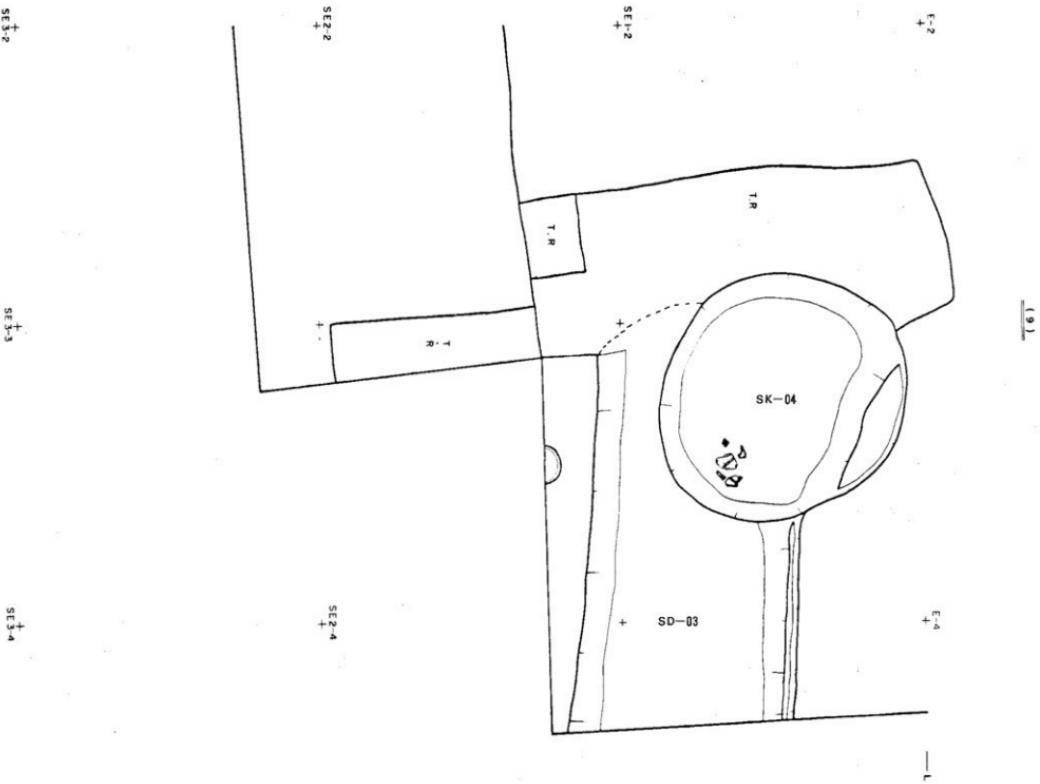
SEI-2
+

DL 560



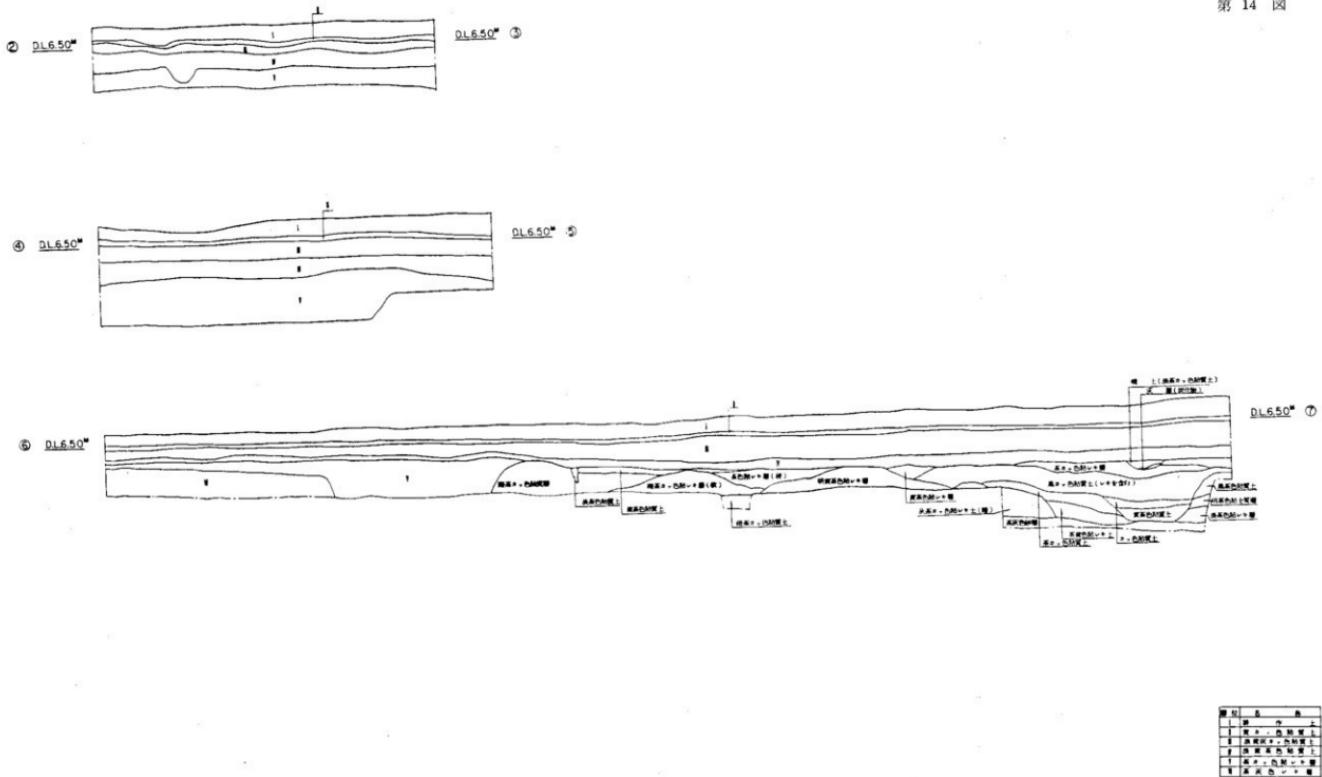
DL 560

第 13 図

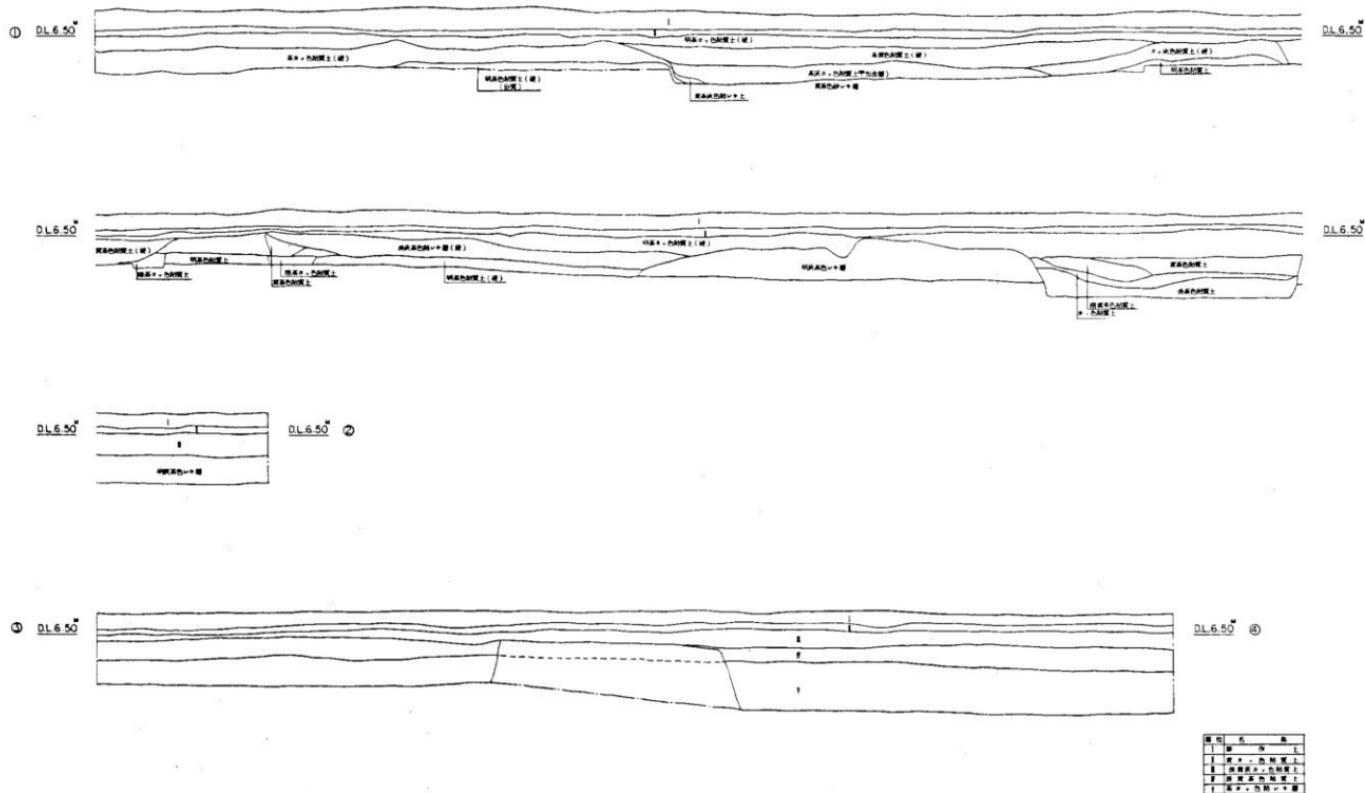


SK-04・SD-03 遺構平面図

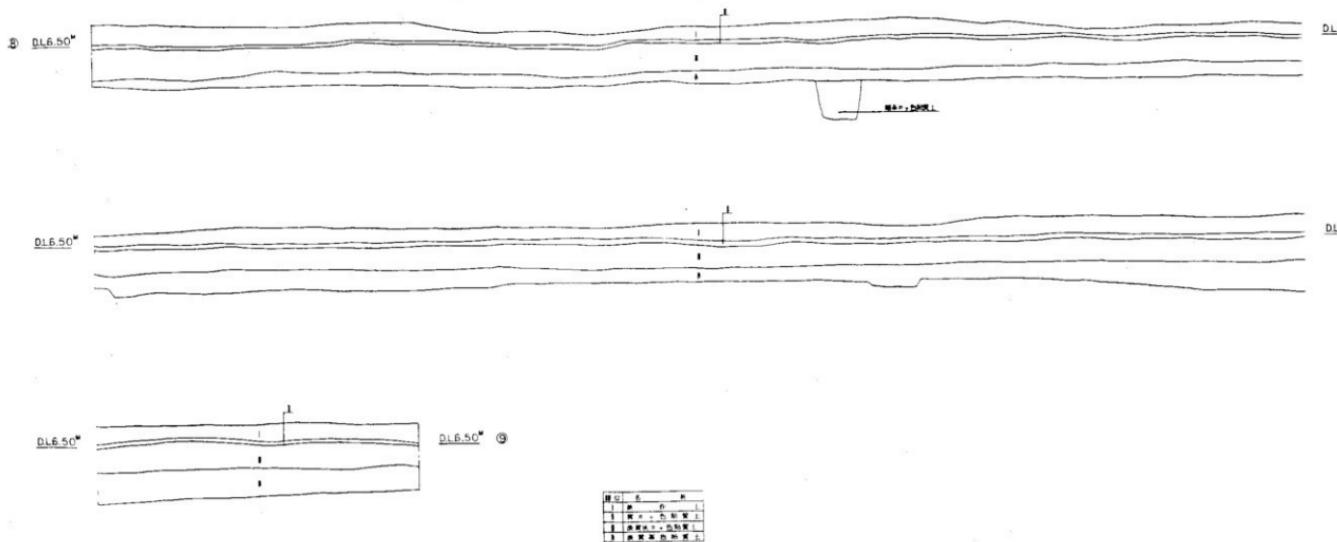
第 14 図



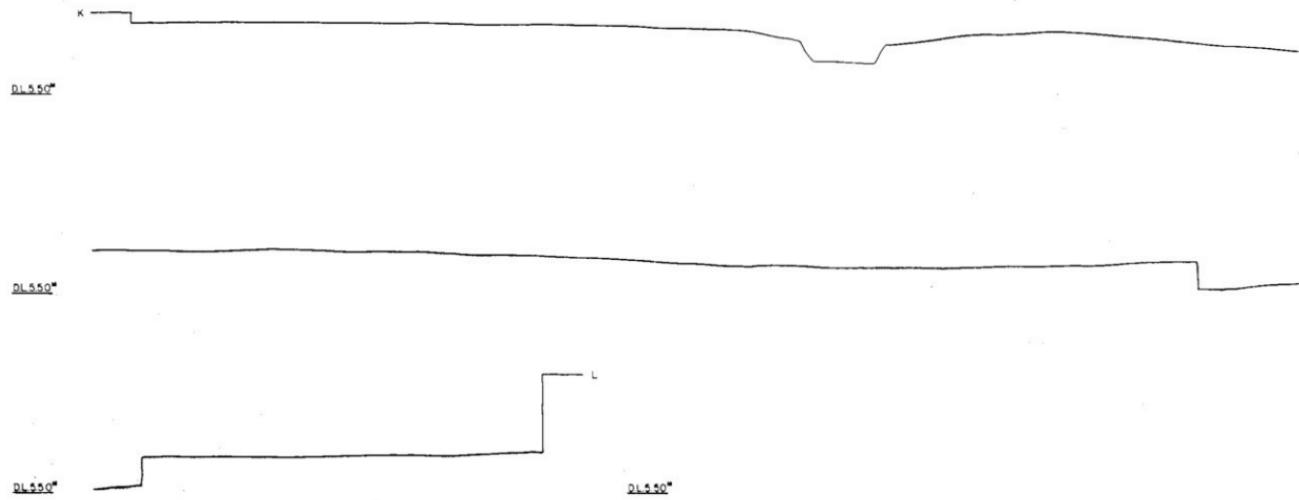
第 15 図



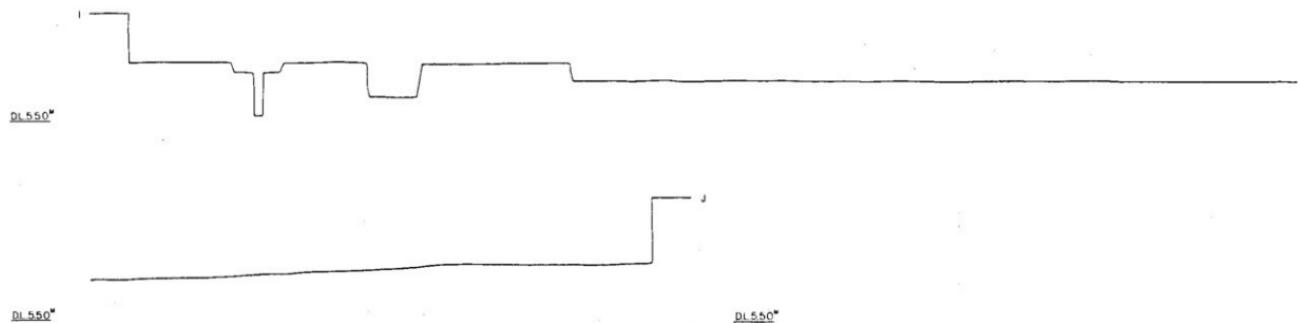
調査区北壁土層序



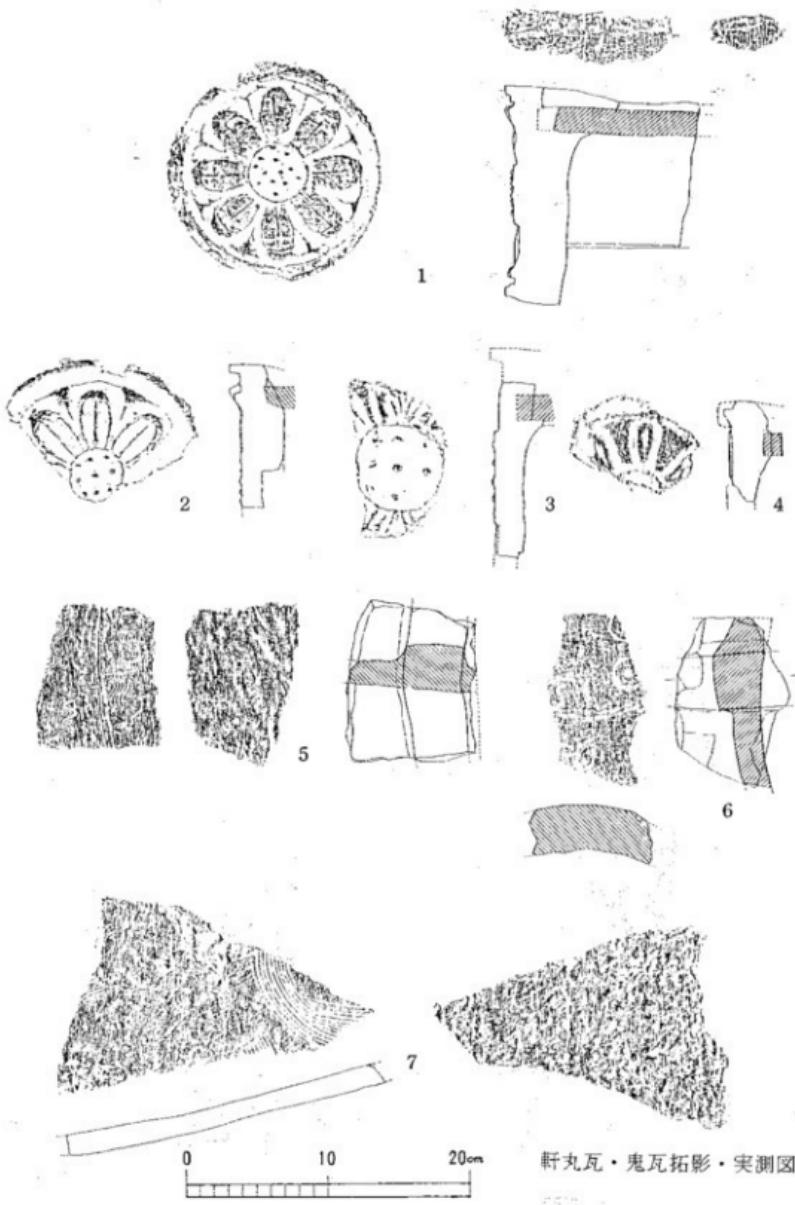
第 17 図



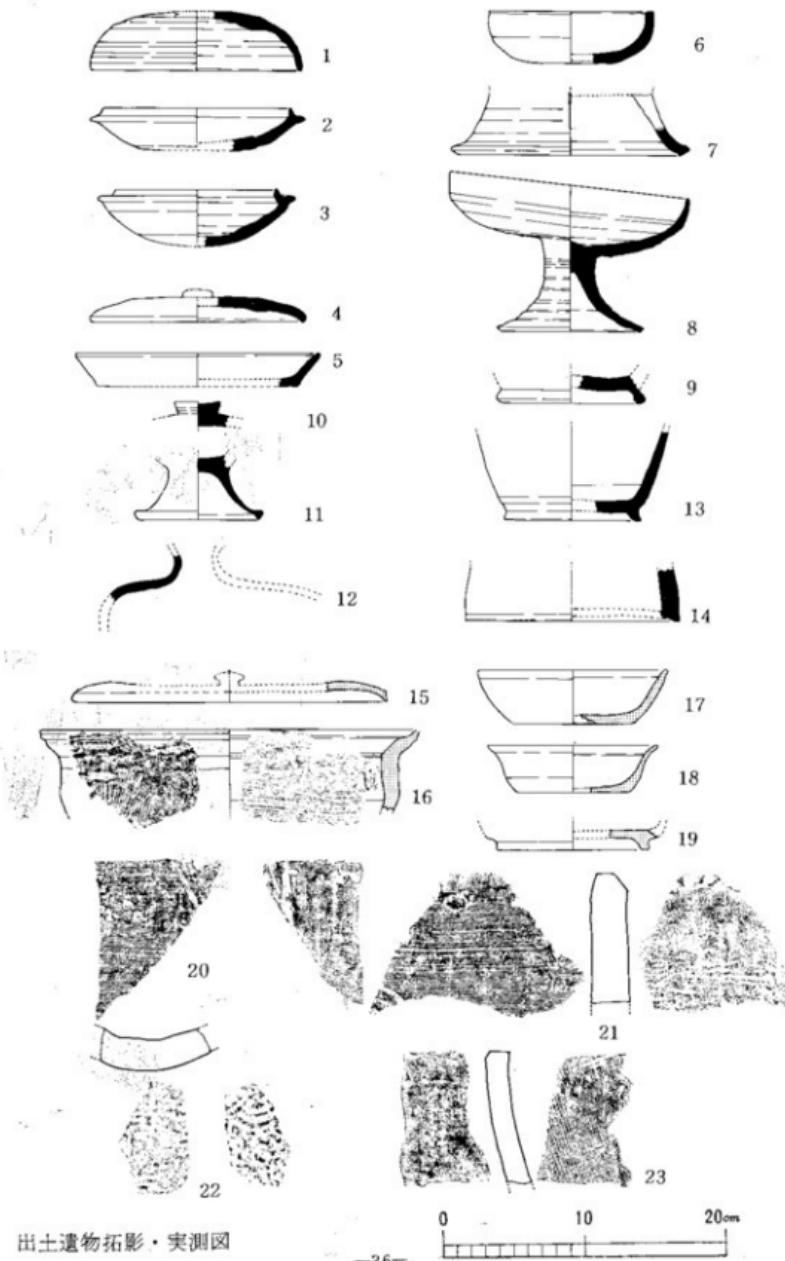
調査区断面図



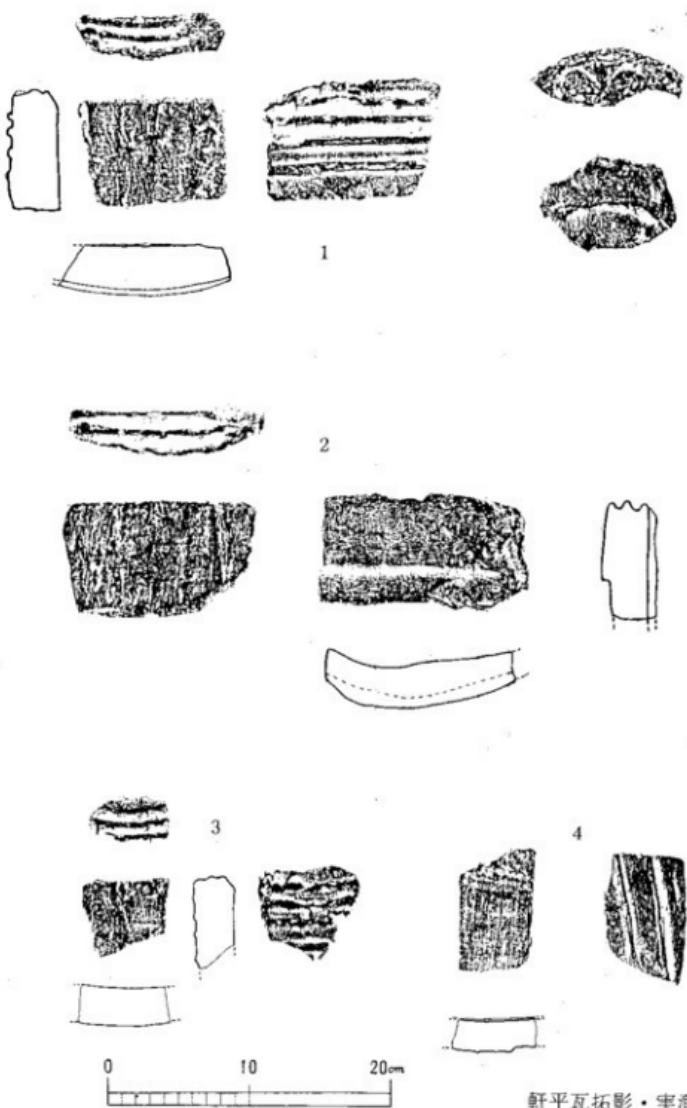
第 19 図



第 20 図

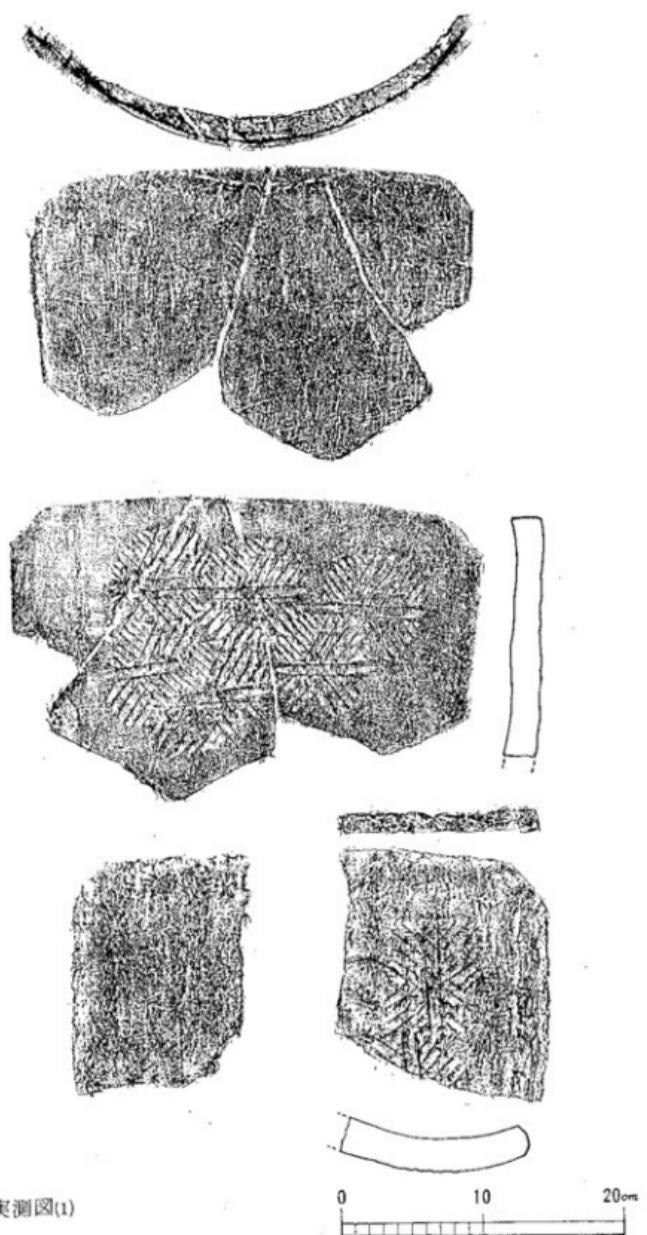


出土遺物拓影・実測図



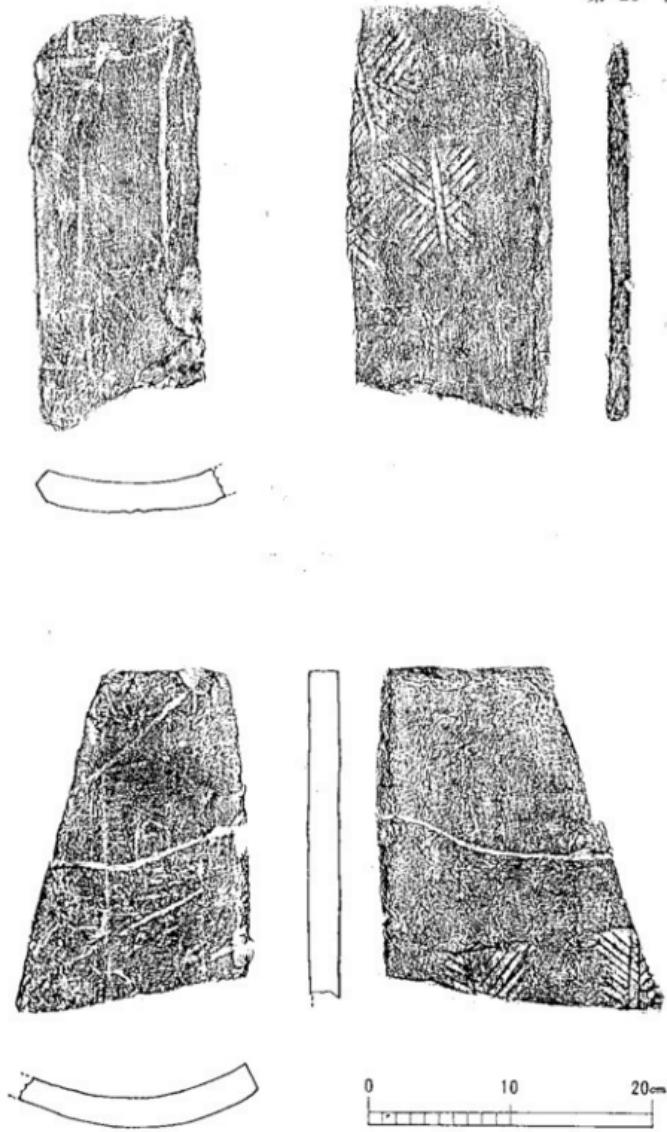
軒平瓦拓影・実測図

第 22 図



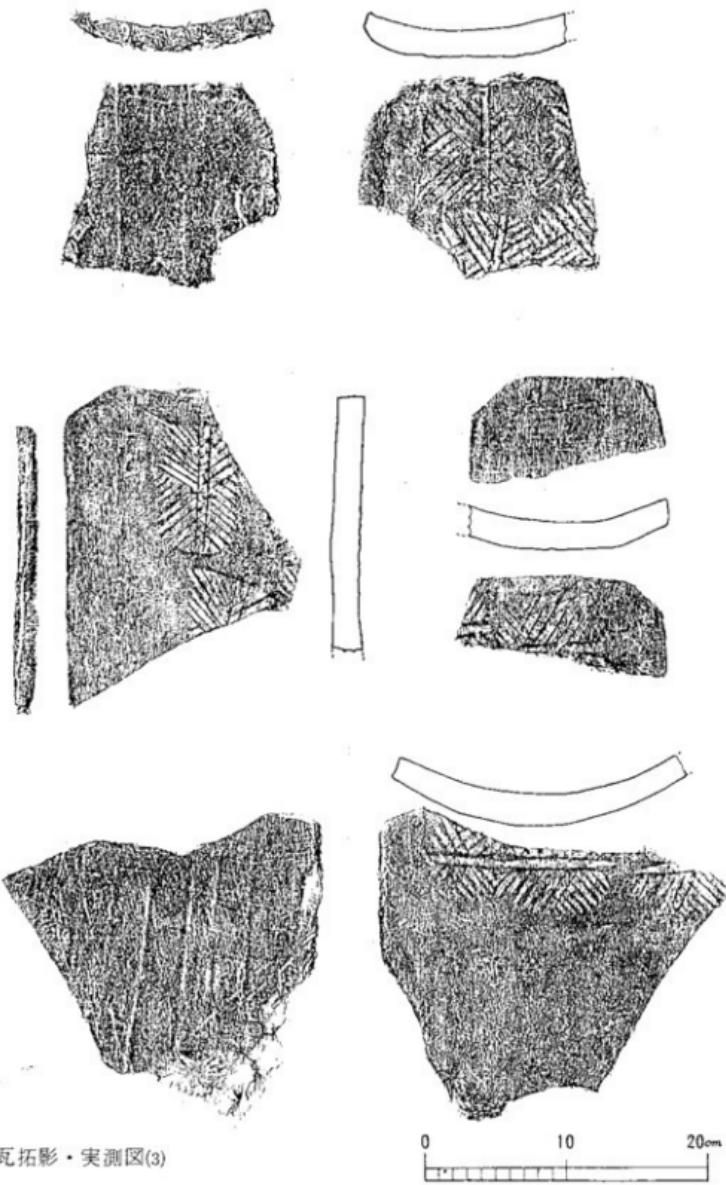
平瓦拓影・実測図(1)

第 23 図



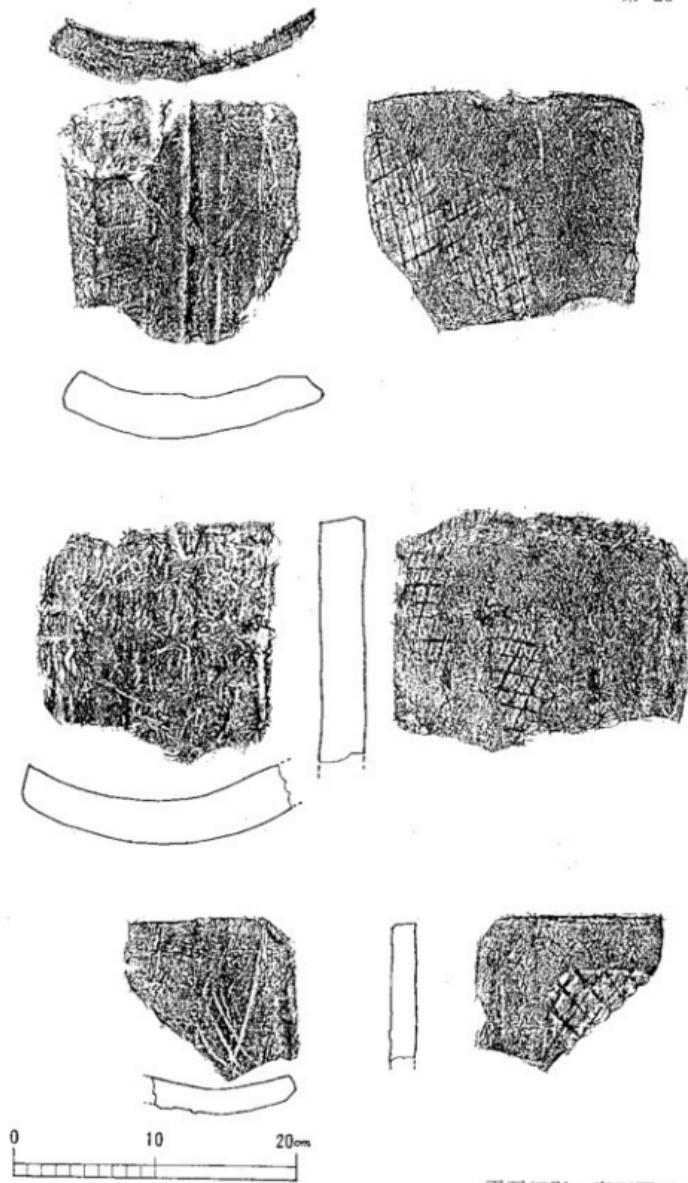
平瓦拓影・実測図(2)

第 24 図



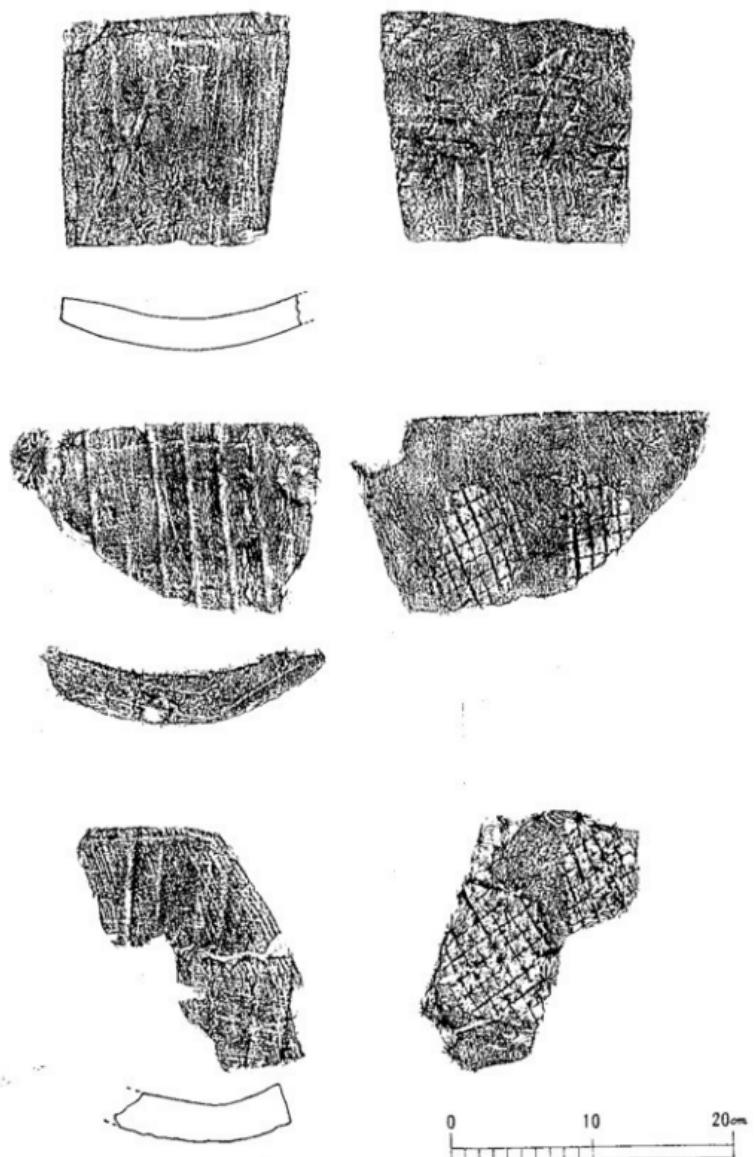
平瓦拓影・実測図(3)

第 25 図



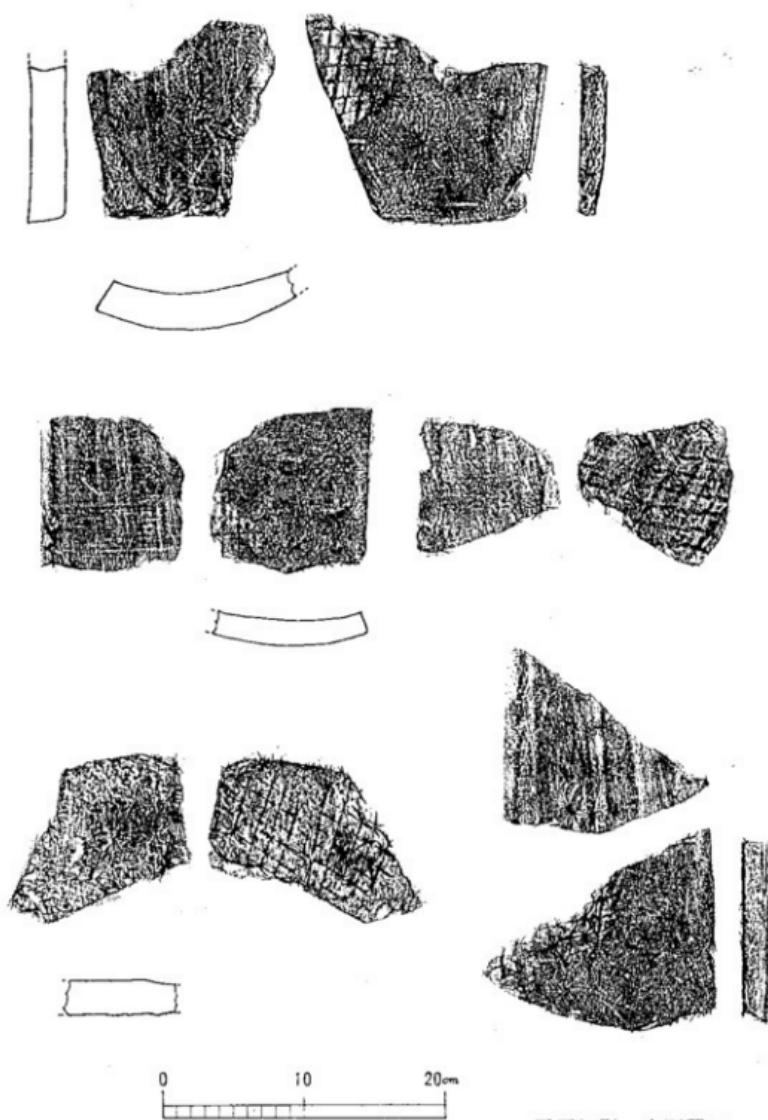
平瓦拓影・実測図(4)

第 26 図



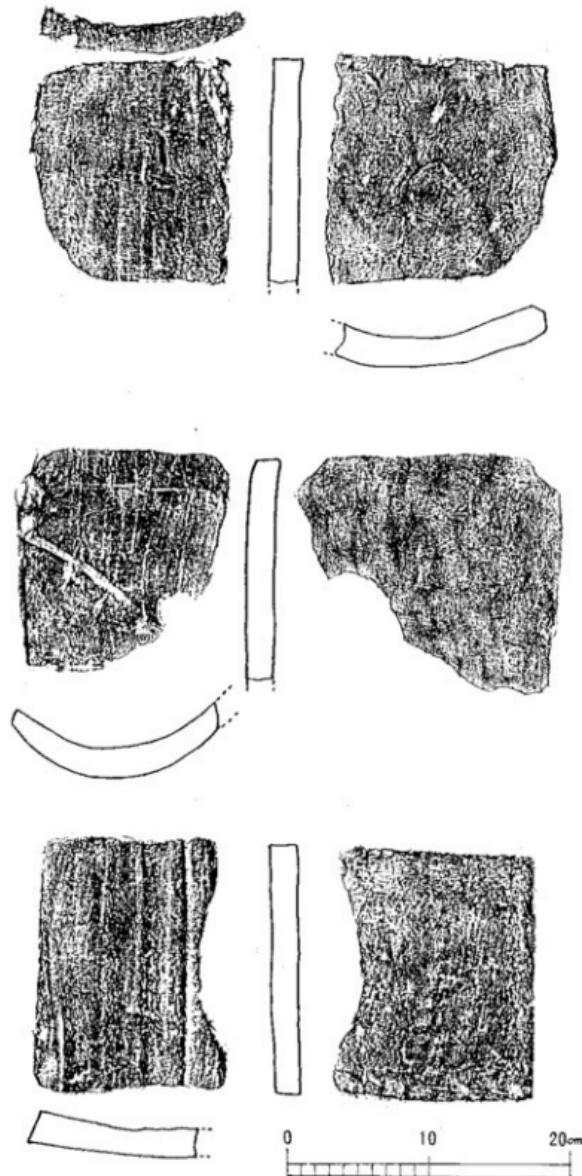
平瓦拓影・実測図(5)

第 27 図



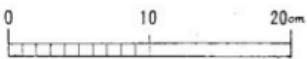
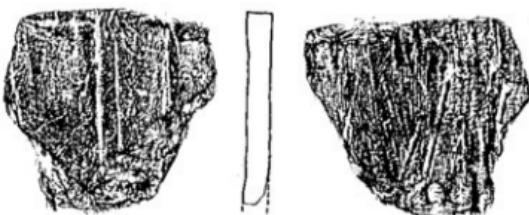
平瓦拓影・実測図(6)

第 28 図



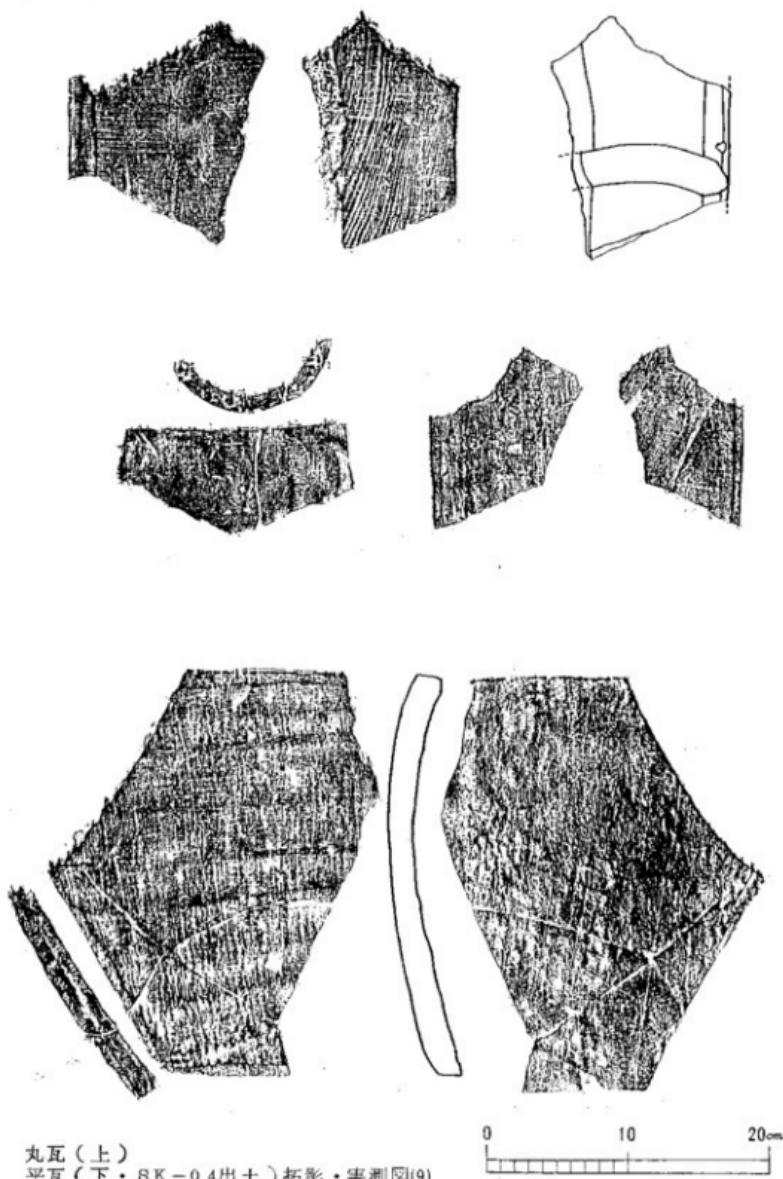
平瓦拓影・実測図(7)

第 29 図

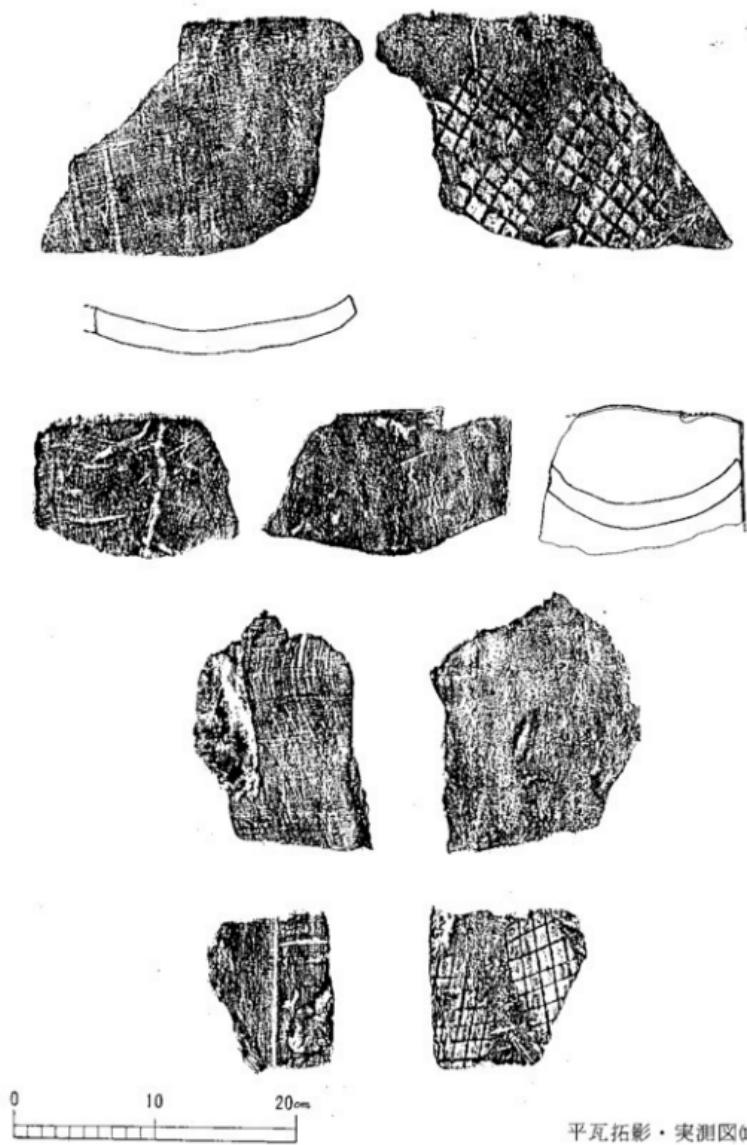


平瓦拓影・実測図(8)

第 30 図

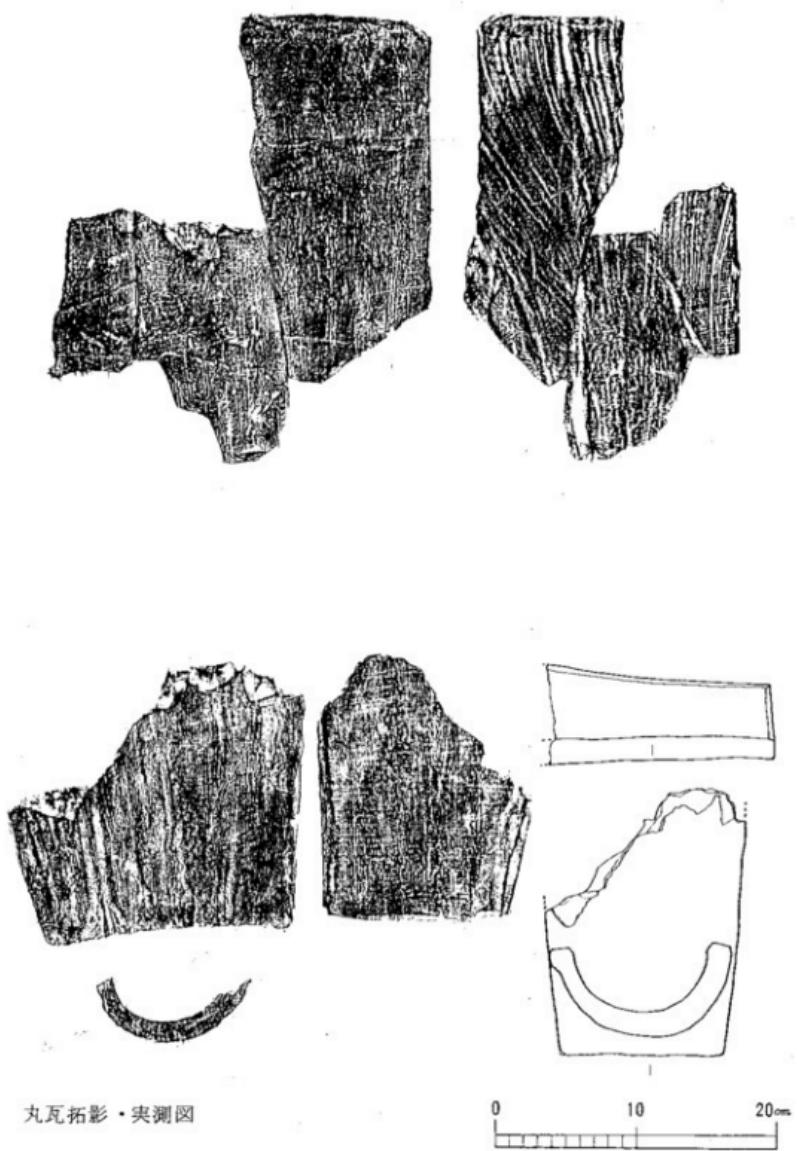


第 31 図



平瓦拓影・実測図⑩

第 32 図



丸瓦拓影・実測図

図 版



調査区東・トレンチ設定状況（西から）

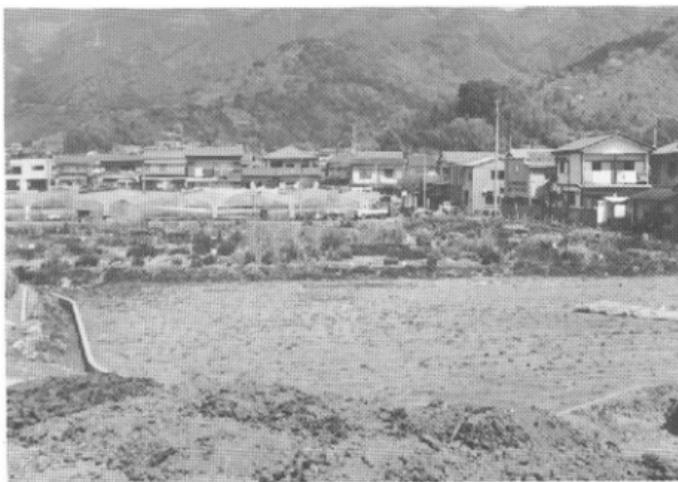


調査区東・集石検出状況（南東から）

図版 2



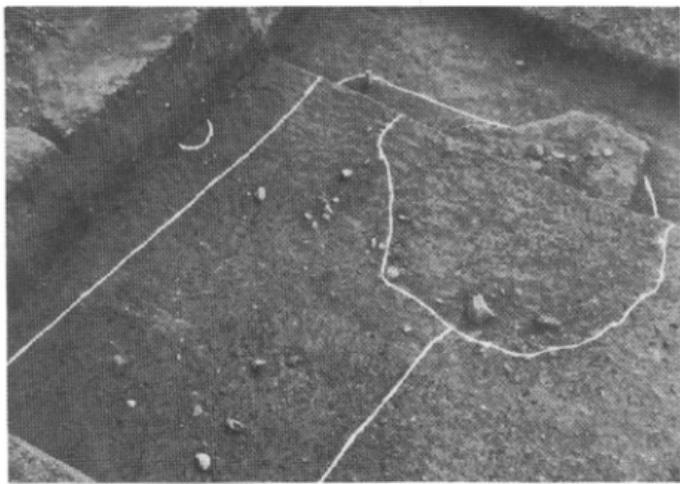
調査区南東・トレンチ設定状況（北西から）



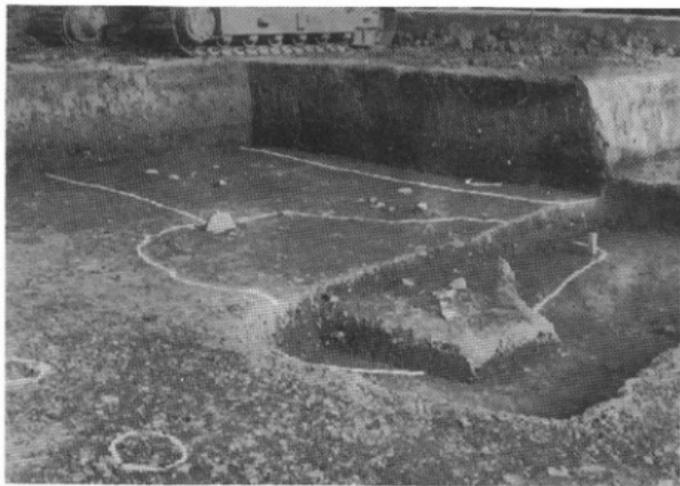
調査区北側・遠景（南西から）



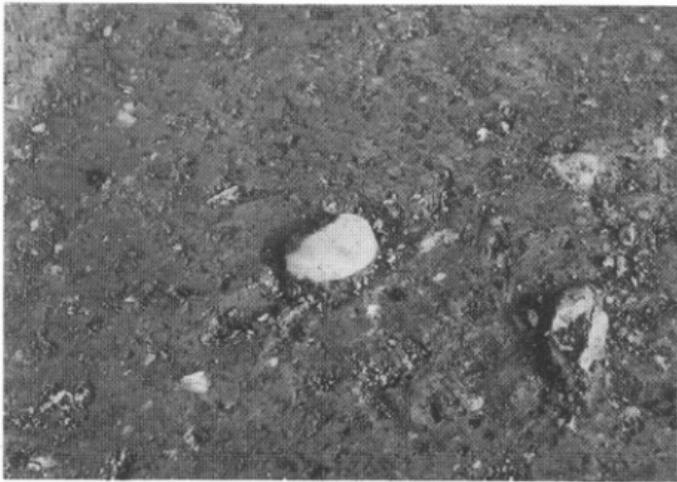
調査区南東・SD-03 検出状況（北西から）



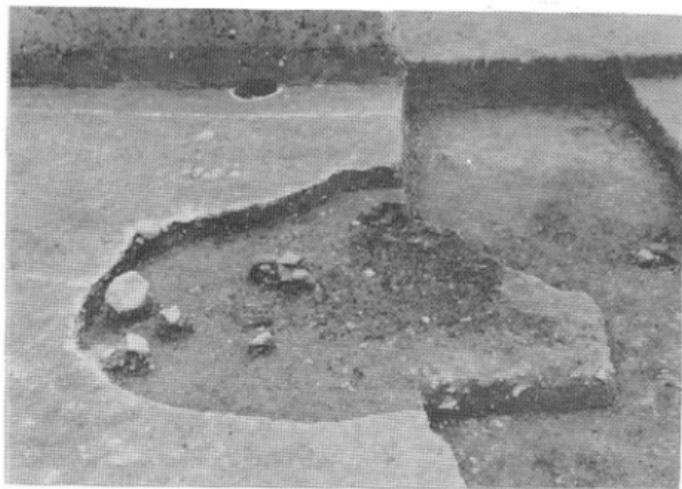
SD-03・SK-04 検出状況（東から）



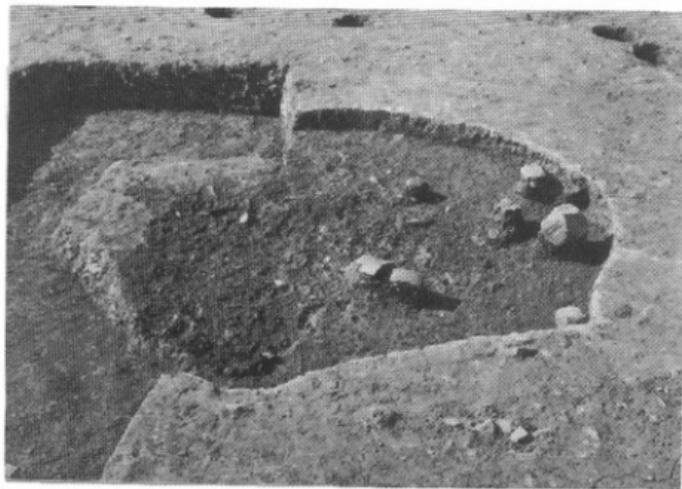
SD-03・SK-04 検出状況（北西から）



SD-03 遺物出土状況（北西から）

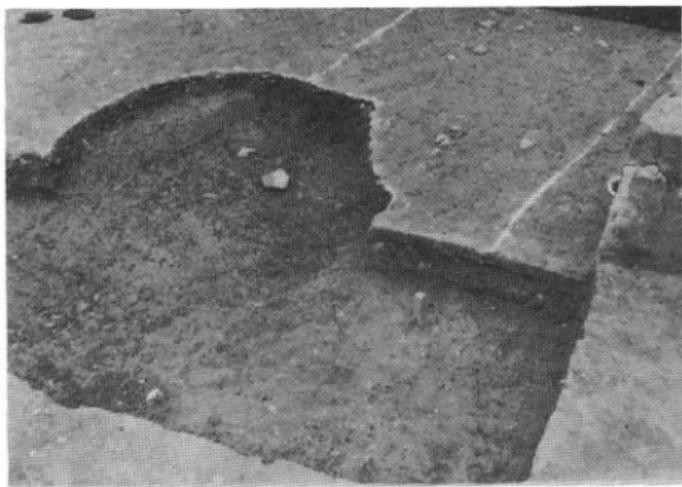


SK-04 遺物出土状況（北から）

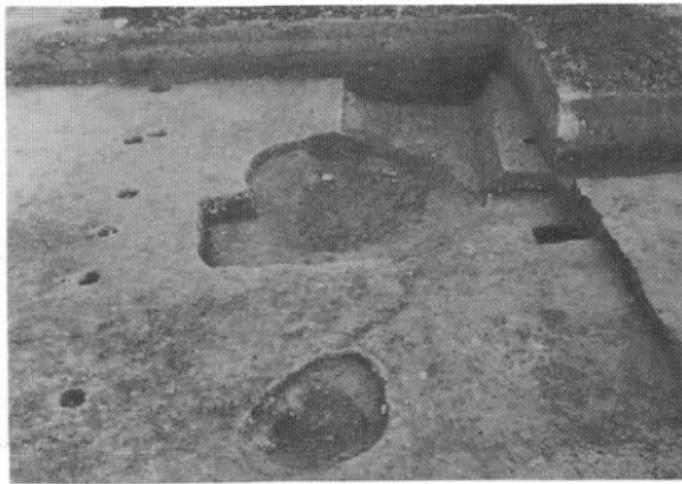


SK-04 遺物出土状況（南から）

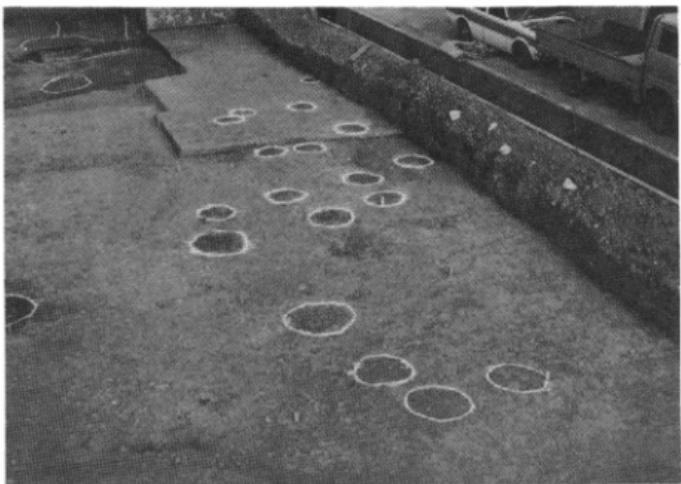
図版 6



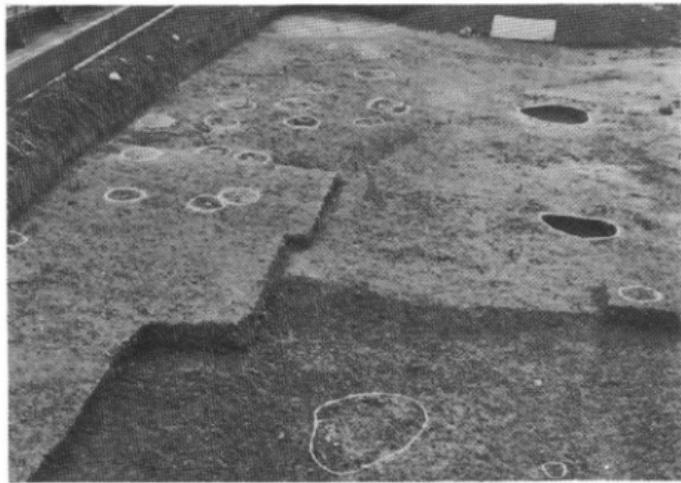
S K - 04 完掘状態・瓦片出土状況（西から）



S A - 01 • S K - 03 • S K - 04 • S D - 03
(西から)



SB-01・SB-02 検出状況（西から）

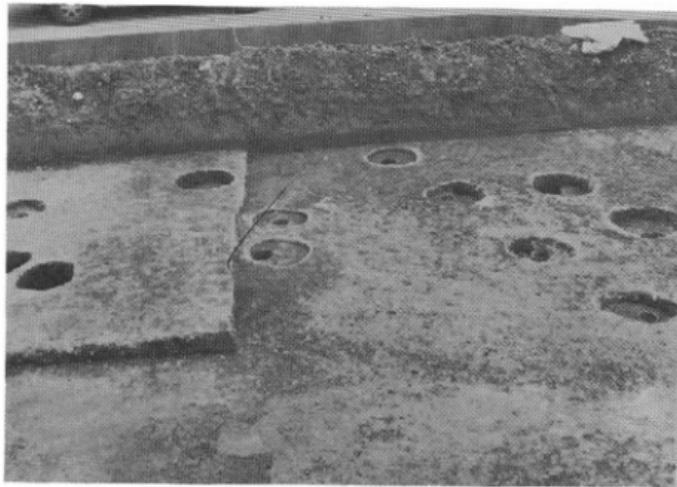


SB-01・SB-02 検出状況（東から）

図版 8



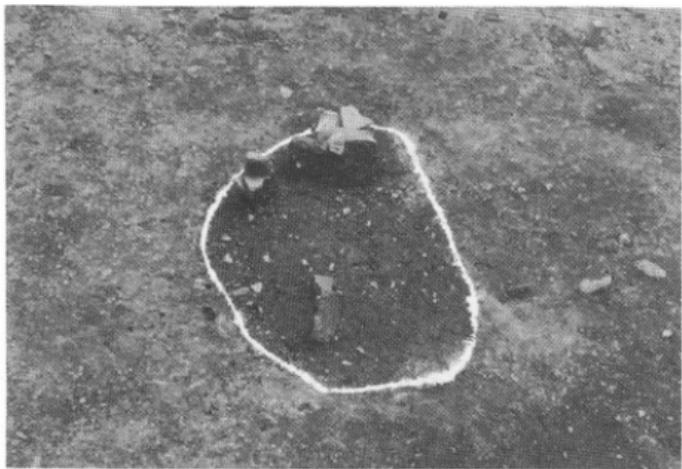
S B - 01 · S D - 02 (東から)



S B - 02 (東から)

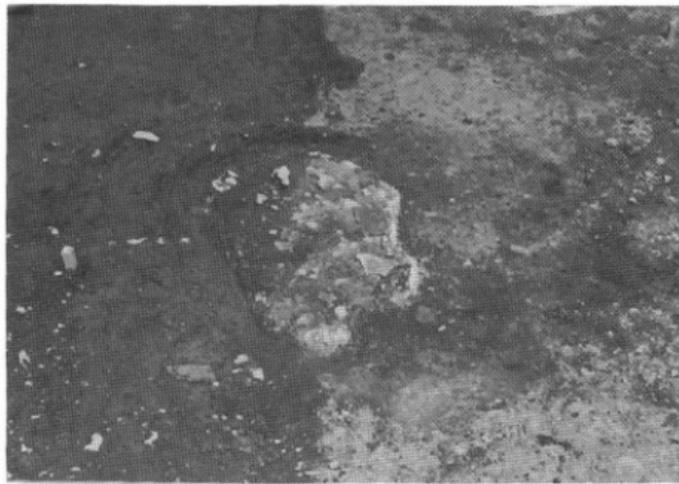


SK-03 (東から)



SK-02・上部・瓦片出土状態

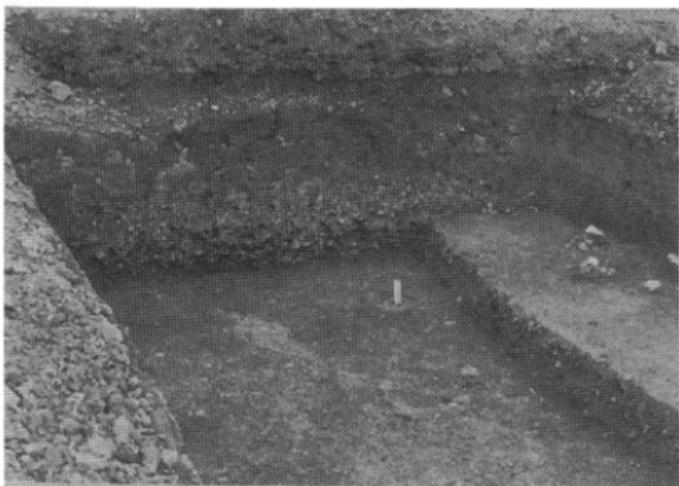
図版 10



SK-01 検出状況・上部瓦片出土状態
(南から)



SA-01 (南から)



調査区東端トレンチ・土層堆積状況
(西から)



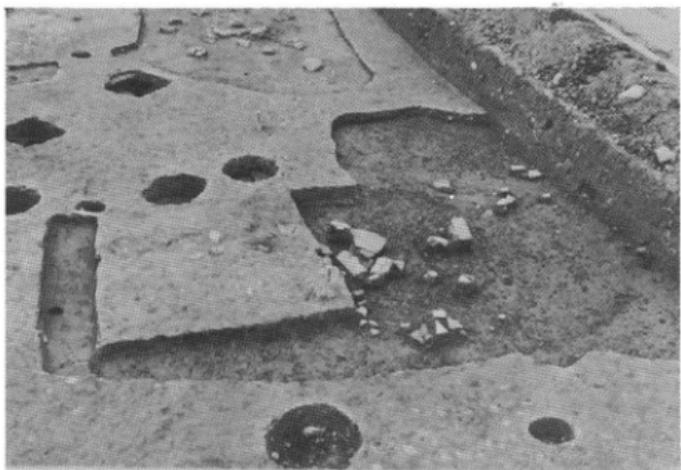
調査区北側・瓦片出土状態(南から)



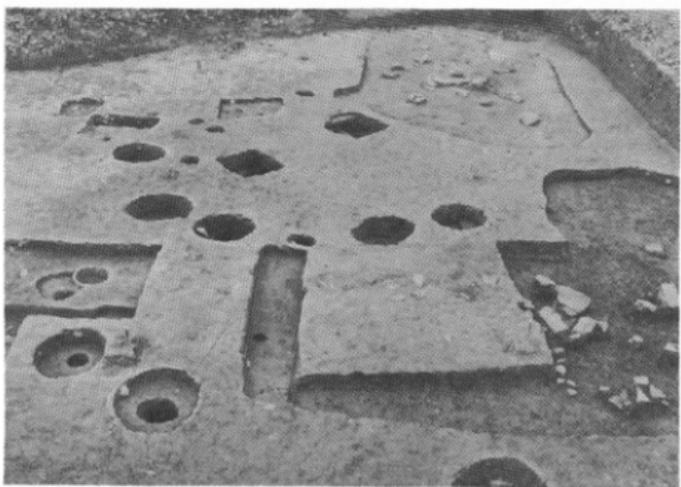
調査区北側・瓦片出土状態
遺構検出状況（西から）



同上近影（南から）



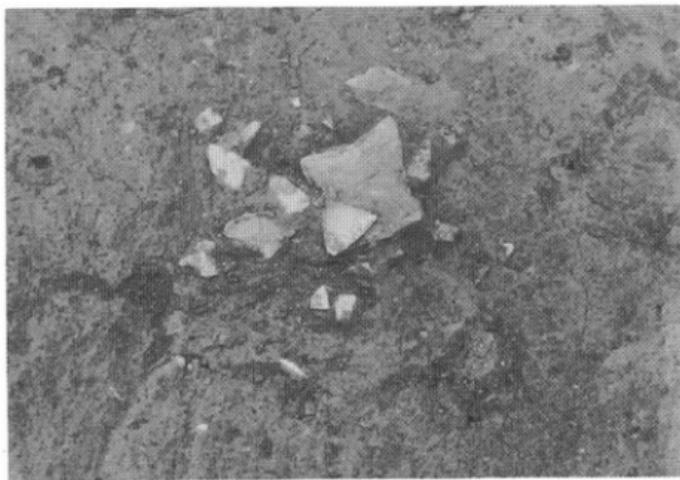
調査区北西・SX-03（東から）



調査区北西・SX-01・柱穴（東から）



S X - 02 上部・瓦片出土状態
(北東から)



調査区北西・遺物出土状態
(東から)



調査区北西・SX-01~03・SK-01
(東から)



調査区北西・SX-03・SD-01
(南東から)



調査区北西・軒丸瓦出土状態
(南東から)



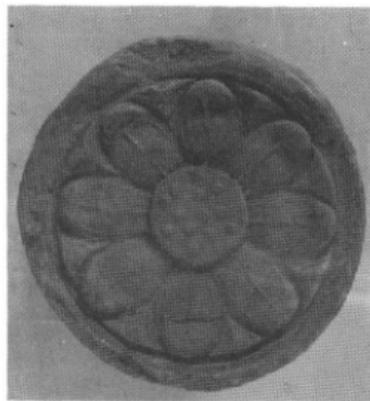
同上近影 (南東から)



調査風景・(西から)



調査区全景・(西から)



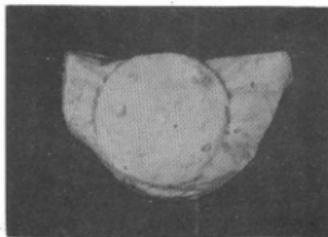
1



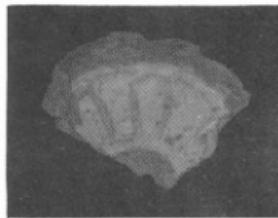
2



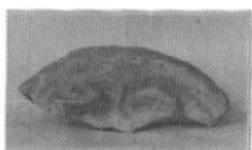
4



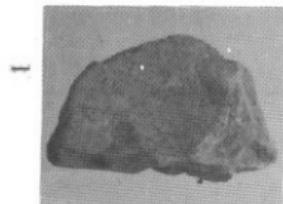
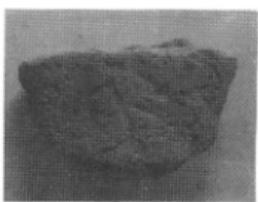
3



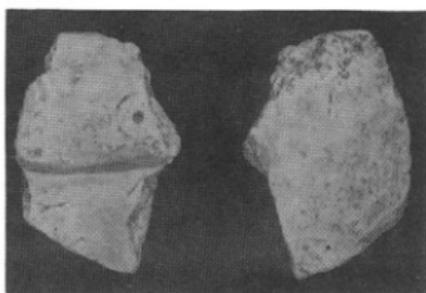
出土遺物軒丸瓦



1



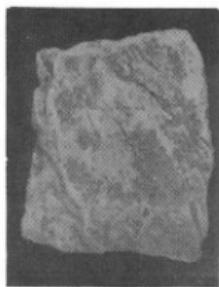
2



6

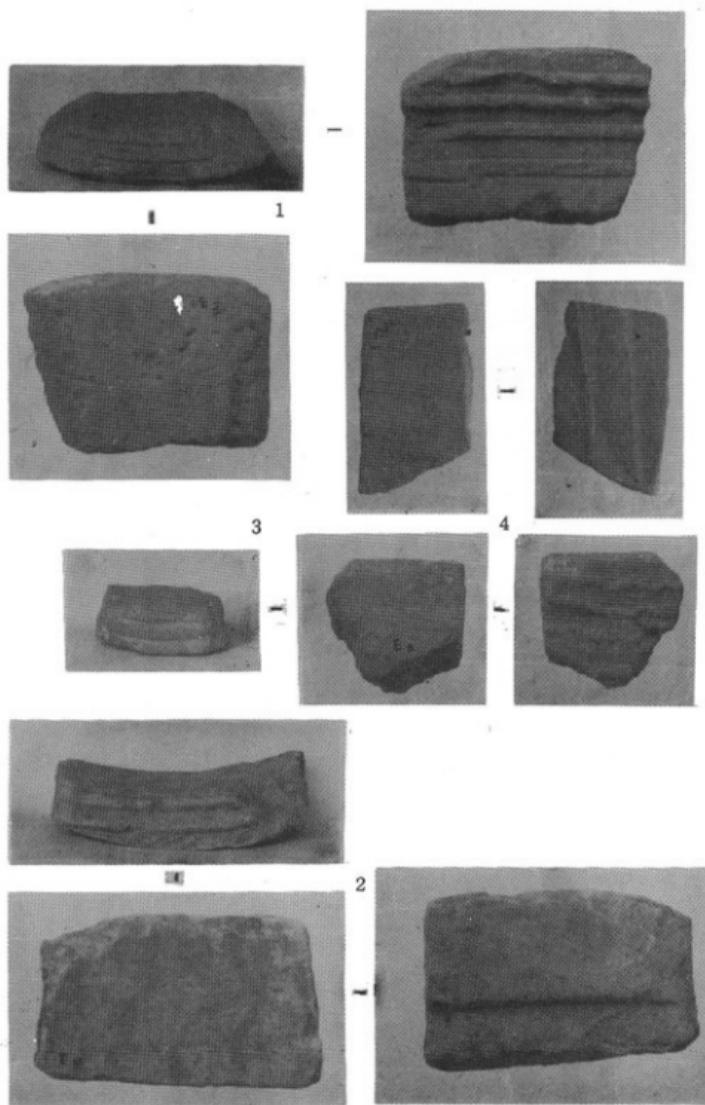


—



5

出土遺物軒丸瓦



出土遺物 軒平瓦